

英語コーパス学会 Newsletter No. 44

Mar. 1, 2004

■会長：今井 光規
■事務局：〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6 京都外国語大学 赤野一郎研究室
■TEL：075-322-6103 ■郵便振替口座：00940-5-250586 (英語コーパス学会)
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■E-mail: i_akano@kufs.ac.jp

JAECS
Japan Association for English Corpus Studies

会長退任挨拶

摂南大学 今井光規

2001年4月から会長を仰せつかってきましたが、この3月末で退任させていただくことになりました。任期途中でしたが、昨年10月の運営委員会で快くお認めいただきました。新会長は、立命館大学の中村純作先生です。中村先生は皆さまご承知のとおり世界に名の知られたコーパス言語学者です。本学会では5年間以上も事務局長をお務めいただき、出版も間近となった10周年記念論文集編集委員会委員長としても並々ならぬご尽力を賜っています。

英語コーパス学会は、齊藤俊雄初代会長のご苦心により急速に発展いたしました。この3年間は会員の皆さまと役員の方のご努力で学会はいちだんと力をつけたように思います。会員数も伸び、会員による国内・外国での学会研究発表数は飛躍的に増大し、コーパス言語学的方法による辞書も編纂されました。10周年記念大会はあれほどの盛り上がりを見せ、前後して多数の著名外国人研究者の来日がありました。ICAMEから本学会に団体名誉会員第1号が贈られたのもつい先日のことのように思われます。これらすべて会員の皆さま、役員の方の皆さまのたゆまぬご努力の成果であります。

学会というものは発達段階に応じて、様々な問題に出会うと言われますが、本学会が常に、会員一人ひとりの気持ちを大事にするという基本に立ち返りながら、今後もますます発展しますよう祈念いたします。皆さまから賜りましたあたたかいご支援ご協力に衷心よりお礼申し上げます。

第23回大会のご案内

英語コーパス学会第23回大会は、4月24日(土)、京都外国語大学 [〒615-8558 京都市右京区西院笠目町 6 : 075-322-6054 URL: <http://www.kufs.ac.jp>] で開催されます。会場へのアクセスは同封の「大会資料」をご覧ください。またこの時期、京都は観光シーズンのため、京都駅周辺のホテルは予約が困難な状況です。遠方より参加される方は早めに宿泊の手配をされることをお勧め致します。

今大会では研究発表3件とシンポジウムを準備しました。研究発表につきましては、1月25日(日)に京都外国語大学で開かれた大会準備委員会で審査しました結果、木村恵氏(東京学芸大学連合大学院生)の「N-gram モデルを利用した日本人英語学習者の発達指標特定の試み 品詞の共起関係による構造複雑性の分析の可能性」、見目卓之氏(元大東文化大学大学院生)の「Why do you 'make a decision' instead of 'decide'? ロジスティック回帰分析に基づく英語軽動詞に関するケーススタディ」、家入葉子氏(京都大学)、家口美智子氏(摂南大学)、岡部浩子氏(神戸市外国語大学大学院生)による共同研究「Corpus of Spoken Professional American-English における文体と

ジェンダーにかかわる諸問題 接続詞の分析から」の3件が選ばれました。

シンポジウムでは、「コーパスとコロケーション」をテーマに採りあげました。コロケーションに関しては、1997年同志社大学で開催された第9回例会で、「コーパスを基礎としたコロケーション研究」のテーマの下、山崎俊次氏(大東文化大学)の司会で一度論じられておりますが、それから7年が経過し、その間のこの分野の進歩はめざましいものがあります。そこで今回は、その折講師を務められた堀正広氏(熊本学園大学、近々Palgrave, Macmillanより *Investigating Dickens' Style: A Collocational Analysis* を出版)を司会者・講師に、東海林宏司氏(茨城刊外教学園短期大学)、Mr. Joseph Tomei(熊本学園大学)に、コロケーションを語法・文法、文体あるいは外国語教育の観点から取り上げていただきます。ご期待ください。

恒例となっております午前中のワークショップでは、科学研究費補助金を得てコーパス研究に必要な諸ツールの開発を進めておられる、松本裕治氏(奈良先端科学技術先端大学)、橋本喜代太氏(大阪女子大学)、投野由紀夫氏(明海大学)、浅原正幸氏(奈良先端科学技術大学)、森田敏生氏(総研技研)を講師に、開発

されたツールの設計指針の紹介と同時に、それらのツールを使ったワークショップを行っていただきます。開発されたツールはすべて無償で公開されるということです。参加御希望の方は、あらかじめ事務局宛てに、葉書あるいは電子メールでお申し込みください。先着 50 名で締め切らせていただきます。英語コーパス学会の会員であれば参加費は無料です(非会員の場合は当日会費 1,000 円)。

大会関連のお知らせは以上です。3 月上旬に竣工予定の京都外国語大学 1 号館で会長、大会準備委員、事務局ともどもお待ちしております。

『英語コーパス研究』第 11 号について

『英語コーパス研究』第 11 号(2004)への投稿状況につきましては、前号のニューズレターでお知らせしましたが、その後の進捗状況をお知らせします。

ご投稿いただいた研究論文、研究ノート、ソフトウェア紹介、書評を査読させていただき、次号の最終的な構成は以下の通りになりました。

- ・講演会記録(齊藤俊雄先生)
- ・論文 5 本、研究ノート 3 本、シンポジウム 1 本、ソフトウェア紹介 1 本、書評 1 本

審査委員の先生方には、お忙しい時期に査読作業を快くお引き受けいただき、丁寧なご助言を賜りました。この場を借りてお礼を申し上げます。

現在校正段階に入っていますが、4 月 24 日京都外国語大学で開催される第 23 大会での配布に向けて、編集委員一同、最善を尽くしております。引き続き会員の皆様のご支援ご協力のほどお願い申し上げます。

なお編集委員としてご尽力いただきました保坂道雄先生(日本大学)が任期満了で退任されました。代わりに岡田毅先生(山形大学)に加わっていただき、山崎、大津、塚本、深谷と合わせて 5 名体制で編集を進めていることも報告いたします。

『英語コーパス研究』編集委員会委員長
深谷 輝彦

JAECs10 周年記念論文集について

English Corpora under Japanese Eyes: JAECs Anthology Commemorating its 10th Anniversary はオランダの Rodopi から出版されている Language and Computers のシリーズの 1 巻として刊行予定であることは、JAECs Newsletter No. 43 でお知らせした通りです。掲載予定の論文 12 編は、クリスマス控えた慌ただしい 12 月を避け、1 月 3 日に、編集主幹である Charles Meyer 先生(University of Massachusetts at Boston)にお送りし、現在査読を頂いております。論文執筆者に対する質問がある場合には、編集委員長の中村を通じて、やり取りして頂くことになっておりま

すので、執筆者の皆さんにはご協力をお願い致します。Meyer 先生に原稿をお送りして 1 ヶ月以上経過しましたが、今のところ連絡はありません。査読が順調に進んでいることを祈っております。

出版社 Rodopi との正式契約は編集委員 3 名と Rodopi の担当者との間で結ぶことになり、JAECs 側の 3 名の署名を済ませたものを Rodopi に送付致しました。Rodopi の担当者の署名がすればその時点で契約成立ということになります。主な契約内容は以下のようになっております。

- ・刊行時期は入稿から 6 ヶ月後。
- ・出版に要する JAECs 側での費用負担は無し。
- ・各執筆者には完成本 1 冊を贈呈。
- ・抜き刷りが必要な場合は PDF 形式でメールにより各執筆者に送付。
- ・執筆者が完成本を購入する際には 40%の割引。

出版の期日がますます遅くなりますが、カメラレディの形での入稿ですので、できるだけ早く出るよう今後も交渉を続けるつもりです。出版の際の費用負担を考え、JAECs 創立 10 周年記念行事の特別会計で 100 万円を計上していただき、執筆者には投稿料をお支払い頂くことになっておりましたが、これらは必要がなくなりました。

JAECs10 周年記念論文集編集委員会委員長
中村純作

東支部活動報告と支部長退任挨拶

1998 年 7 月に東支部設立準備委員会を齊藤俊雄会長(当時)の本務校の大東文化大学で開催してから、東支部主催の「コンピュータを利用した英語研究」と題して講演や講習会を 10 回開催してきました。この東支部の講習会は、基本的には学会員の少ない東支部の充実と、特に学生や研究者あるいは中学、高校、大学の教員を対象にコーパス言語学の紹介と有効利用を理解してもらうことが主な目的でした。講師は国内外から招き(G. Leech, J. Aarts, P. Rayson, S. Johansson, S. Hofmann, 吉村由佳、塚本聡、投野由紀夫、赤瀬川史朗、山内豊、見目卓之等)活発な活動を行ってきました。内容は、ソフトとコーパスの有効利用(BNC, BNCWeb, TXTANA, WordSmith, KWIC 等)インターネット利用、統計処理、コーパスと英語研究等多岐に渡り、参加者は毎回 30 人を超えました。参加者からは、1 年に 2 回開催して欲しい、夏休みを利用し泊り込みの合宿形式で開催して欲しいなどの声が聞かれました。

この一連の東支部の活動を通して、多くの講師や参加者と直接話すことができましたし、コーパス言語学に対する興味と期待が高まっていることを、肌で感じることができ喜んでおります。この場を借りて、二代の会長、事務局、会計係、そして講師と参加者に感謝の

意を表し、次期支部長の新井洋一先生(中央大学)の下、今後東支部がますます発展することを祈念いたします。

JA ECS 東支部支部長
山崎俊次

新入会員紹介

JA ECS Newsletter No.43 (2003年9月11日発行)
以降の新入会員の方は次の通りです(3月1日現在、
敬称略)

川月 現大	有限会社 風工舎
中野 智文	名古屋工業大学
Britto, Francis	上智大学
Lorence, Anthony	岡山理科大学

名簿訂正のお願い

(個人の住所および電話番号は、オンライン版のニューズレターでは公開しておりません。郵送されるニューズレターをご覧ください。)

事務局では、会員名簿のできる限り正確な管理に努めておりますが、記載内容に変更や誤りがございます。その際は、ご一報ください。誤りについては事務局の勝手をお詫びいたします。

赤瀬川史朗	Lago 言語研究所
井村 誠	(住所変更あり)
井上 学	(住所変更あり)

事務局から

会費納入のお願い

4月24日大会当日の受付は混雑が予想されますので、2004年度会費(一般5,000円、学生4,000円)は同封の郵便振替用紙を使い4月15日までにお納めください。住所、所属などに変更や異動のある方は、必ず通信欄にお書き添えください。なお郵便局発行の受領証をもって領収書に代えさせていただきますので、ご了承ください。学会の領収書が必要な場合は、必ず返送先を明記した返信用封筒(必要な切手を貼付したもの)を同封の上、事務局の高橋薫までご請求ください。

2003年度会費未納の方は、2004年度分と合わせてお納めください(振替用紙にその旨記しております)。行き違いになりました場合は、何とぞご容赦ください。会誌『英語コーパス研究』第11号は2003年度の会費を納入していただいた方のみ配布となります。また、2年続けて会費未納の場合、JA ECS Newsletterなどの送付を中止させていただきます。

その他

事務局では、シンポジウムやワークショップの企画・アイデアを随時募集しております。英語コーパス学会の大会プログラムとしてふさわしい内容のものがありましたら、どしどしご提案ください。

FORUM 欄への投稿もお待ちしております。海外の学会・研究の動向、新刊・近刊圖書の紹介、身近なコーパス研究のエピソードなどでも結構ですのでお寄せください。

FORUM

The International Corpus of English (ICE) に関する情報から

新井洋一(中央大学)

昨年出席したふたつの学会でたまたま顔を合わせ、最も親しく話しができた研究者の一人に、Dr John Kirk (The Queen's University Belfast) がいる。彼は Dr Jeffery Kallen (Trinity College Dublin) や他の二人の若くて有能な女性スタッフと共に、ICE の Ireland 部門を担当しており、完成に向けて準備中とのことである。本稿ではこの ICE に関係する最近の情報で、JA ECS 会員に役立つと思われるものをふたつ紹介したい。

ICE の連合王国部門 (ICE-GB) の CD-ROM 版はすでに完成し、JA ECS の会員の中にも、すでに購入し利用されている方もおられると思う。しかし他国の部門で、CD-ROM 版が入手可能なものがあること、しかも GB 版と違い、梱包・郵送料のみでよいことは、意外と知られていないと思われる。たとえば、India 部門、Singapore 部門(どちらも100万語の書き言葉・話し言葉コーパス)や Philippines 部門(40万語の書き言葉)、East Africa 部門 (Release2, 2002) などはライセンス承諾書を送付すれば、梱包・郵送料のみで入手が可能である。それぞれの入手先・入手方法については、<http://www.ucl.ac.uk/english-usage/ice/avail.htm> を参照されたい。

もうひとつは DCPSE に関するものである。DCPSE とは、Diachronic Corpus of Present-day Spoken English のことで、Bas Aarts 氏 (Department of English, University College London) のもとで進行中のプロジェクト(2002年8月~2004年7月)である (<http://www.ucl.ac.uk/english-usage/diachronic/index.htm>)。既に完成済みの ICE の連合王国部門の話し言葉コーパスと、The London-Lund Corpus (LLC) から、それぞれ対応するカテゴリーごとに40万語ずつ抽出し、両者を一括検索できるようにした合計80万語からなるイギリス英語の話し言葉コーパスである。

LLC は 1960 年代に編纂された話し言葉コーパスであり、ICE-GB は 1990 年代に編纂されたものである。DCPSE は現代英語の話し言葉の通時コーパスとしての利用に主眼が置かれており、このコーパスによって、25～30 年間の現代英語の変化を観察することが期待される。収録コーパスは自然な、自発的な話し言葉コーパスのみに限定し、準備原稿のあるカテゴリーに含まれたものは省かれている。すべての語句や文に標識付けと文法解析が施されており、ICE-GB でお馴染みの ICECUP (the ICE Corpus Utility Program) による検索が可能ということである。今年の夏の完結を目指しているこのプロジェクトの成果に期待したい。

中等学校におけるコーパス利用 教師と生徒の視点から

藤原 康弘 (岡山大学教育学部附属中学校)

近年、コーパス利用が言語学から応用言語学の範疇へも広まり様々な利用法が模索されつつある。例えば Hunston (2002) *Corpora in Applied Linguistics* (CUP) が出版され、コーパスの教育現場の応用が論じられている。そこで本稿では「中等学校における教師と生徒の視点からどのようにコーパス利用が行えるのか」に焦点を当て、コーパスの種類 (raw corpus, pedagogic corpus, learner corpus) に応じた関連情報を紹介する。

Raw Corpus (RC)

British National Corpus (BNC), Bank of English 等の native-based のコーパスであり、教師には自身の英語力向上に利用できるだろう。というのもコロケーション、同義語の微妙な差異は非常に能力の高い英語使用者でもなかなか掴めないためである。多くの研究者や教育実践者が主張するように、RC をモデルとするのは母語話者礼賛の態度を助長しかねない、日本のような EFL (EIL) の国では母語話者はモデルにならないと筆者は考えるが、英語使用者の一つの「窓」として覗いてみることに価値はあるだろう。

RC を利用するためには、今までは検索ソフトのインストールが必要であり、問い合わせ言語の専門的知識が要求されていたが、最近、Internet Explorer のみで BNC を簡単に検索できる Corpus Query System 「さくら」が利用可能になった。この「さくら」は KWIC 検索、ソート機能、コロケーション一覧表示 (統計処理を含む) 等の Word Smith のようなコーパスソフトの機能を備えており、検索結果を自身の PC にダウンロード可能という優れものである。更に 4 月より Wordbanks Online のサービスが始まり、今後は、科学技術コーパス、日本人学習者コーパスも利用可能になる。詳細は「小学館コー

パスネットワーク」(<http://www.corpora.jp/>) を参照されたい。

Pedagogic Corpus (PC)

教師自身の英語力向上には RC は役立つものと考えられるが、学習者には教科書、練習問題、入試問題等を集積した pedagogic corpus (PC) が妥当と思われる。というのは RC は中学生にとって未知語があまりに多く実質理解不能なものである上に、母語話者のみの英語を模範とする態度の助長は今後の国際社会に妥当な日本人英語話者育成には不適切と考えられるからである。

PC は疑う余地なく指導の幅をひろげ、テストの作成等に役立つであろう。中学生の指導現場を例にとると、at, in, on 等の場所を示す前置詞の微妙な差異を学習者がコンコードスラインから帰納的に読み取る data-driven learning (DDL) を実施したり、達成度テストを作成する上で、出題する文法項目に相応しい用例を抽出することが容易にできる。

PC は著作権の問題上、残念ながら未だ一般に公開されていない。しかしながら、投野由紀夫先生 (明海大学) によれば、既に中・高英語教科書、graded readers、入試問題、英検問題等を集積した PC は構築済みとのことで、解禁される日を待ちたい。

Learner Corpus (LC)

中学生の LC で現在利用可能なものとしては三浦省吾先生 (広島大学) 監修の英語学習者コーパスがある (<http://home.Hiroshima-u.ac.jp/d052121/eigo1.html>)。LC は周知のように error analysis の分野で広く利用可能で、教師が経験上知りえた生徒によくある誤りを実証的に確認できる。更に生徒の予測可能な誤りや、指導上誘発される誤り (induced error) を避ける助けとなり、指導方法向上が期待できる。

生徒にとっては、訂正活動を促し、文法意識の昂揚が可能であろう。たとえば、中学生に典型的な誤りを LC から抽出し、次に学習者に提示し、生徒自身にペアワーク等で訂正させるような活動が考えられる。このような活動は「同じ中学生の作文」という意味で、生徒達に身近である上に、発見学習であるが故に生徒に英語を意識させ、観察する態度を身につけさせることができる。

現在、東京学芸大学を中心に大規模な中高校生学習者コーパス構築プロジェクトが進行中である。このプロジェクトにご協力いただける方は「学習者コーパス：中学・高校プロジェクト」(<http://leo.meikai.ac.jp/~tono/datacollect.html>) にアクセスしていただきたい。

今後、RC、PC、LC、また日英両表記の parallel corpus 等がより身近となり、中学校教員のコーパス利用能力が高まれば、上記の多種のコーパスを「相互作用」させることにより、創造力あふれる利用法が見出されるだろう。今後の進展に期待したい。

英語コーパス学会 Newsletter No. 45

May 25, 2004

■会長：中村 純作
■事務局：〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6 京都外国語大学 赤野一郎研究室
■TEL：075-322-6103 ■郵便振替口座：00940-5-250586 (英語コーパス学会)
■URL：<http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■E-mail：i_akano@kufs.ac.jp

JAECS
Japan Association for English Corpus Studies

会長就任挨拶

立命館大学 中村 純作

本年4月より、今井光規先生の後を引き継ぎ、会長職をお引き受け致しました。この場をお借りして、コンピュータやコーパスの歴史を振り返りつつ、個人的なコーパスとの出会いなどに触れながら、一言、ご挨拶を申し上げます。

世界で初めての電子コーパスが、1964年に公開されたBrown Corpusであることは周知の事実ですが、世界で初めてのコンピュータについてはあまり知られていません。1946年軍事利用を目的に米国で開発されたENIAC (Electronic Numerical Integrator and Computer) が電子計算機第1号だと言われています。1万7千本の真空管を使い、論理回路は10進法、プログラミングは配線により行うものでした。現在のような半導体素子を使い、2進法に基づいたプログラム内蔵型のコンピュータは10年後の1956年にIBMにより開発されと言われています。翌年にはChomskyの*Syntactic Structures*が出版されました。その後、コンピュータは目覚ましい発展を遂げますが、Brown Corpusの時代はまだその第1期で入力にはカードとキーパンチを使用、磁気テープで公開されたものでした。

Chomskyの*Aspects of the Theory of Syntax*が出たのは1965年で、その時代、小生は学部の3年生、約1年ほど滞在したオハイオ州立大でFillmore、Langendoenなどから生成変形文法を教わり、コーパスは構造言語学の用語として習っただけでした。学部卒業後、1年ほどしてコロラド大学大学院に留学、コンピュータサイエンスを副専攻にし、当時の大型コンピュータを少し勉強しましたが、修士論文にはやはり変形文法を取り上げました。ところが、帰国後数年経った頃から、母語話者の直観を持たない英語を対象に研究を続けることの限界を感じ、我々非母語話者に欠けている直観の代わりにするのは大量のデータではないかと気がつき、テキストデータベースの作成に取り掛かかった訳です。コンピュータが2世代目になりキーボード入力が可能になりかけた1980年代の初めでした。1983年にJ. Sinclairと徳島で会う機会があり、コーパスの可能性を語り、ICAMEの存在も知りました。この時代にコーパス言語学という言葉が世に広まるのですが、次にSinclair先生に会うのは在外研究でバーミンガム大学に行った1992年でした。その当時、小生の前には赤野一郎先生、後に井上永幸先生がやはりバーミンガムを訪れています。帰国直後に、当時大阪大学言語文化部におられた齊藤俊雄先生、今井光規先生を中心に、我々にもお声をかけて頂き、JAECSの前身、英語コーパス研究会が60名ほどのメンバーで設立されました。

それから12年が経ちました。その間、年2回の大会開催、会誌『英語コーパス研究』の刊行、年4回のNewsletterの発行、講演会やワークショップの開催など、活発な活動を続け、会員の数もこの春の大会で350名に達しました。昨年4月にはICAMEの名誉団体会員第1号として認定され、創立10周年記念論文集もオランダのRodopiからLanguage and Computersのシリーズとして出版されることになるなど、海外に向け日本のコーパス言語学の成果を発信できるまで実をつけてきました。今、我々が使っているようなコンピュータの原型が世に出て50年たらず、コーパスが誕生して40年、ICAMEが設立されて25年ほど、本学会ができてからはまだ12年ですが、世界のレベルに迫るまで、肩を並べることができました。これも、会員の皆様のご協力に加え、齊藤、今井歴代会長のリーダーシップの賜物だと思っております。齊藤先生にはそのご努力に感謝する意味をこめて本学会の顧問にご就任頂きました。今井先生が会長就任のご挨拶の中で、2代目が学会を潰さないよう努力したいと言われましたが、3代目として会長に就任するにあたり、その言葉が思い出されます。世の中の常として、どうやら3代目の孫が先代の築き上げたものを潰す場合も多いようです。そのようなことがないよう、会員の皆様のご支援と運営委員の先生方のご協力を得ながら努力したいと思っておりますので、よろしくお願い致します。個人的な話題が中心で、長くなってしまいましたが、ご挨拶と致します。

第 23 回大会報告(1) 概要

英語コーパス学会第 23 回大会は、4 月 24 日(土)、京都外国語大学の真新しい 1 号館小ホールで開催されました。当日は天候にも恵まれ、事務局の調べでは会員の参加者 79 名、新入会員 17 名、当日会員 30 名、賛助会員 1 名の合計 137 名の出席がありました。

午前中のワークショップは「自然言語処理技術を活用したコーパスツール」と題して松本裕治氏(奈良先端科学技術大学)、投野由紀夫氏(明海大学)、浅原正幸氏(奈良先端科学技術大学)の 3 人に講師を務めていただきました。最初に、松本先生から自然言語処理の技術を活かし独自に開発されたタグ付きコーパス管理・検索ツール「茶器」の開発経過と概要の説明が行われた後、奈良先端科学技術大学院生の皆さんのサポートの下に、定員を遙かに越える 70 名の参加者が実習に熱心に取り組みました。

午後の大会では、中村純作会長(立命館大学)の開会の挨拶のあと、開催校を代表して、京都外国語大学学長の堀川徹志先生からお言葉をいただきました。次いで神谷昌明先生(豊田工業高等専門学校)に司会をお願いし、年次総会が開かれ、平成 15 年年度の決算と平成 16 年度の予算をお認めいただきました。しかしながら、その後、予算案に事務局の不手際による誤りがあることが判明しました。訂正版を同封しておりますので、ご確認下さい。今後このようなミスが生じないよう務めますのでご容赦下さい。

引き続き 3 件の研究発表とシンポジウムが行われました。概要につきましては、司会の先生にご執筆願いました「研究発表報告」と「シンポジウム報告」をご覧ください。

大会終了後の懇親会には 60 名を越す会員に出席して頂きました。吉村由佳先生(慶応大学非常勤)に司会をお願いし、会長挨拶、乾杯のあと、会員同士の交流と情報交換でおおいに盛り上がり、午後 8 時にすべての大会行事が終了いたしました。

ちょうど 10 年前に赤野が勤務します京都外国語大学で第 4 回大会が開催されましたが、今回に比べささやかな大会でした。冒頭にも記しましたように、137 名という、第 20 回の記念大会(参加者数 148 名)を除けば、学会史上最大の参加者を得まして、第 23 回大会を無事終えることができました。「スムーズな大会運営だった」、「施設が良かった」というアンケートのご回答を頂き、会場校としてホッとしているところです。同僚の石川保茂先生には、開催に関わる一切の手配と準備をお願いし大変お世話になりました。学生の皆さんにも、会場準備、受付などのお手伝いをいただき大変お世話になりました。この紙上を借りて厚くお礼申し上げます。

第 23 回大会報告(2) 研究発表

N-gram モデルを利用した日本人英語学習者の発達指標特定の試み 品詞の共起関係による構造複雑性の分析の可能性

木村 恵(東京学芸大学連合大学院生)

本発表は、N-gram を利用して、異なる英語習得レベルに位置づけられた学習者の文構造の特徴を特定しようと試みたものである。文構造の分析というと一般的に構文解析(parsing)を思い浮かべるところであるが、本発表では既存の parser での分析を用いず、CLAWS での品詞タグ付与に基づいた「品詞連鎖」の分析を行なうこととし、大量の誤りを含む学習者コーパス、中でも「話し言葉」コーパスを検討した。

先行研究に従い、学習者コーパスに出現する品詞の 3 連鎖(trigram)を、初級者グループ、中級者グループ、上級者グループのそれぞれについて求めた。その結果、以下のことが明らかになった。(1) 初級者は「冠詞(限定詞) - 名詞」の連鎖が極端に少なく、冠詞を omit するエラーが見られる。(2) 中級者になると「代名詞 - 動詞」、「動詞 - 代名詞」のように代名詞を使用し始め、「副詞 - コンマ - 代名詞」のように、文頭に副詞を用いる現象が現れる。そして、(3) 上級者には「冠詞 - 形容詞 - 名詞」、「代名詞 - 副詞 - 動詞」のような、形容詞や副詞の挿入が特徴的に現れた。

本発表は、学習者コーパスに現れる初級者から上級者への発達の変化を記述しようという意欲的な試みとして、まずは品詞の連鎖に着目したものである。得られた結果は英語教育者が教育経験から得る知見を裏付けているように思える。しかしながら、発表者も指摘したように、学習者の発話には「流暢さ」、「文構造の複雑さ」に加え、「誤り」という側面もある。本発表の成果を踏まえ、今後はそれらの関連も含めた分析が期待できる。

中條 清美(日本大学)

Why do you make a decision instead of decide ?
ロジスティック回帰分析に基づく英語軽動詞に関するケーススタディ

見目 卓之(北海道大学大学院生)

本発表は軽動詞句 make a decision と意味的に等価の 1 語動詞 decide の使い分けについて、計量的観点から検証したものである。まず、軽動詞(例: have, make, take)と軽動詞句(例: have a drink, take a breath)が Quirk et al. (1985)などに基づいて定義され、続いて先行研究が紹介された後に、本論に入った。

コーパスは BNC を使用し、4 つの使用域(Newspaper, Academic books, Popular fiction, Informal conversation)からそれぞれ 150(合計 600)例をランダムにとりだして、make a decision と decide の使い分けの要因となりえる 42 の因子を設定して、ロジスティック回帰分析を試みた。その結果、decide よりも make a

decision が好まれる環境は、(1) 否定語と共起する場合 (...did not make a final decision ...) (2) 補語としての前置詞句と共起する場合 (...involve making decisions about people ...) (3) 補語を伴わない場合 (I now needed to make some sort of a decision.) (4) 形容詞による修飾を伴う場合 (...make a final decision ...) であることが明らかになった。

その理由を考察して、次の事実が指摘された。「否定語 + make a decision」は「意志」を表す will/would と共起する傾向がある。補語を伴わない用例を詳細に見ると、人称代名詞 I との共起が顕著である。make a decision を修飾する形容詞は「政治」「適切さ」「重要度」を表わずものが多い。以上の議論を踏まえて、発表者は次の結論に至る。make a decision は「主観的な」決定をする場合に使用される傾向がある。一方、decide は「客観的な」決定をする場合に多く使われる。

フロアからは、先行研究とほぼ一致した結論になっているがコーパスに基づいて立証していることが評価される、言語の使用域による差はなかったか、使い分けの要因となる因子に voice (態) を入れてはどうか、そもそも make a decision と decide が等価であるか、などの意見があり、本研究の今後の広がりにつながる有意義な質疑応答となった。

畠山 利一 (大阪国際大学)

Corpus of Spoken Professional American-English における文体とジェンダーにかかわる諸問題 接続詞の分析から

家入 葉子 (京都大学)・家口美智子 (摂南大学)・岡部 浩子 (神戸市外国語大学大学院生)

本発表は、CSPAЕ (=The Corpus of Spoken Professional American-English) において頻度の高い7つの接続詞を調査することにより、場面の違い(コーパスには White House, Faculty meetings, Mathematics tests, Reading tests の4つの場面が含まれている)や話し手のジェンダーの違いが文体とどのように関わっているかを分析したものであった。

頻度を基にした主成分分析により、全体像をみたのちに従属接続詞の場合と等位接続詞の場合をそれぞれ詳細に調査した結果、従属接続詞については場面による違いが、等位接続詞についてはジェンダーによる違いが際立っていることが明らかになった。White House のファイルが expository talk の傾向を示すのに対して、Reading tests のファイルでは exploratory talk の特徴が見られるという結論は、発表者3名がこれまで共同研究によって進めてきた文体の分析に合致するものであった。一方、ジェンダーによる言語の違いは発話の最初に現れる and や but の使い方において特徴的であるという結論であった。この結果は、女性が、自分の発話と前の話者との発話を結び付けようと

する、いわば対人関係を重んじる態度の現れと解釈された。

発表後、調査の対象とする接続詞の選定の方法や多変量解析の詳細に関する活発な質疑応答がなされた。本発表で扱われたジェンダーと接続詞の関連性について、今回扱われなかった接続詞についても、今後の研究成果が期待される場所である。

佐藤 恭子 (プール学院大学)

第23回大会報告(3) シンポジウム

コーパスとコロケーション

本シンポジウムの目的は、コーパスを利用したコロケーション研究の歴史を確認し、現在の研究動向を踏まえ、各講師が関心を持っているコロケーション研究を披露し、コロケーション研究の重要性と可能性を探ることにある。

コロケーション研究概観

最初に堀正広講師(熊本学園大学)がコロケーション研究の歴史を1950年代のJ. R. Firthから始め、60年代(理論構築)、70年代(方法論の模索)、80年代(成果)、90年代以降(研究領域の広がり)に分類して説明。コロケーション研究の歴史が簡潔にまとめられて勉強になったという、コメントがあった。

コロケーションと文法・語法

東海林宏司講師(茨城キリスト教大学)は non-literary language におけるコロケーションと文法語法の問題を、数量的な分析だけでなく意味的な分析の重要性を指摘。特に、-ly 副詞が強意副詞になるメカニズム、つまり、まず物理的な位置関係(高さ、深さなど)のメタファーとして用いられ、次に副詞「本来」の意味が薄れて強意副詞となる経緯を具体的に分析した。

コロケーションの定義についての質問があった。node を中心とした前後数語とするか、文法的な関係を重視するか、など。コロケーション研究によって何を明らかにするかによって定義は異なり、限定しない方がいいのでは、というのが一応の結論。

コロケーションと文体

3番目に堀正広講師が文学作品の文体における collocation 研究の重要性を強調し、実践例として Charles Dickens の collocational style を18、19世紀の小説家と比較して明らかにした。また、低頻度の collocation と文学言語の創造性との関係を指摘した。

あるコロケーションがないということはどう考えるのか、文学批評との関係は、などの質問があった。言語記述とその解釈は区別して考える必要があるように思われる。

コロケーションと英語教育

最後の Joseph Tomei 講師(熊本学園大学)から、学習者コーパスを研究者や教師が作成するのではなく、学習者自らが自分の英文コーパスを作成し、コロケーションなどの問題点を自らが探だし、認識し、学習していくという新たな学習法とコーパス作成の方法論が示された。学習法は学習者自身が自分の英文コーパスを扱うことによる学習の動機付けの促進ももくろみのひとつである。

この学習者コーパスに関してはフロアーから賛否両論があった。Tomei 講師自身認めているようにまだ始まったばかりのプロジェクトで十分な結果を提示できていないが、斬新な発想と教授法は数年後に再び拝聴したい内容である。

シンポジウム全体を通してフロアーからの活発な質疑応答がありこのテーマに対する関心の高さを痛感した。

堀 正広(熊本学園大学)

人事に関する決定事項について

大会前日の4月23日午後6時より開かれた運営委員会において人事案件がいくつか承認されました。まず今井光規先生(摂南大学)より中村純作先生(立命館大学)の会長交代の報告が赤野からあった後、中村新会長より、齊藤俊雄先生(大阪大学名誉教授)を顧問にご就任頂くこと、それに伴い第7条「本学会に顧問をおくことができる。顧問は役員を退任したもので本会の発展に特に功績のあったものとする」を追加することが提案され、満場一致で承認されました。

次いで山崎俊次先生(大東文化大学)より新井洋一先生(中央大学)の東支部長交代、大津智彦先生(大阪外国語大学)の運営委員の新規委嘱および深谷輝彦先生(相山女学園大学)より大津智彦先生の編集委員会委員長の交代が、中村会長より提案され、それぞれ承認されました。

第24回大会の日程と研究発表募集

2004年度の秋期大会(第24回大会)は10月2日(土)に日本大学文理学部(〒156-8550 東京都世田谷区桜上水 3-25-40 京王線下高井戸あるいは桜上水下車、徒歩8分)で開催される運びとなっております。是非、今から出張の予定に組み込んで頂ければ幸いです。会長、大会準備委員、事務局ともどもお待ちしております。

大会での研究発表を次の要領で募集いたします。発表を希望される方は、下記の要領に従って、電子メールで事務局にお申し込みください。

- 【資格】本学会会員であること
- 【内容】本学会にふさわしい、コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた研究
- 【提出物】発表要旨をA4判25字×32行で3~4枚以内にまとめMS Word、一太郎、PDFファイルのいずれかで提出すること。ただし、参考文献表は枚数に含めない。要旨の冒頭には題名のみを記す。メール本文には氏名(ふりがな) 所属・職名、住所、電話番号、電子メールのアドレスを明記すること。
- 【応募締切】2004年6月25日(金)必着
- 【採否決定】2004年7月20日(火)(予定)
- 【その他】発表25分+質疑応答10分

会誌『英語コーパス研究』第11号について

第11号の巻頭には、本学会設立時に会長に就任され、その後学会の土台作りに邁進されました齊藤俊雄先生より、「私のコーパス言語学研究への道」という原稿をいただくことができました。この中で、齊藤先生はご自身の研究史を語りながら、同時に日本における英語コーパス研究史も語っていらっしゃいます。英語研究においてコーパスの使用があたりまえとなった昨今、改めてコーパス研究の意義を考えさせる貴重な論考と言えます。

今回は、5本の論文、3本の研究ノートを載せています。コーパス研究の大きな可能性を感じさせる多様な研究成果が盛り込まれています。品詞の分布とテキストの変遷を結びつけようというTsukamoto論文、多国籍にわたる学習者口語コーパスを用いて、「肯定的」感情表現を比較検討する小林論文、従来取り扱いが不十分だった英語副詞の辞書記述に新たな光をあてる吉村論文と多彩な論文が並びます。さらにYaguchi et al.は、ほかしことばkind of, sort ofの男女差を話し言葉コーパスで分析し、新しい仮説を提案しています。松野の論文もcountry imageという新たなコーパス分析を提案しており、大変興味をそそられます。研究ノートでは、アカデミック英語教育にミニ・コーパスを活用するNoguchi、「文末重点の原則」をコーパスで検証する伊藤・高橋、bigとlargeの原級、比較級、最上級をコーパス・データで比較しそれらの暗示的意味を明らかにする古田と、それぞれにユニークな研究を提示してくれます。

シンポジウムについては、22回大会で好評を博した「英語構文研究の実践 - コーパスの貢献」を活字化しました。但し、内容は発表時の原稿を整理し、発展させた部分も加わり、魅力的な報告を4本並べることができました。どうかお楽しみください。

最後に高見先生には、Simple Concordance Programという検索ソフトの紹介をお願いしたところ、その長所、短所を的確にまとめていただきました。須賀

先生からは Meyer の英語コーパス言語学入門書について当を得た書評をご執筆いただき、感謝申し上げます。

投稿された執筆者の方々にお礼を申し上げますとともに、審査の過程で査読にご協力いただいた先生方、山崎俊次、大津智彦、塚本聡、岡田毅編集委員、編集陣中いつも励ましの声をかけてくださった今井先生、事務局の赤野先生に、この場をお借りして感謝申し上げます。

最後に、過去4年間にわたり『英語コーパス研究』の編集の任にあたってまいりましたが、この4月より大津先生が新しい編集長に就任することになりました。私のようなものがこうして任期を終えることができますのも、ひとえに学会員みなさまのご協力のおかげと存じます。本当にお世話になりました。今後も『英語コーパス研究』がますます発展しますことを願っております。

深谷 輝彦 (梶山女学園大学)
『英語コーパス研究』編集委員会前委員長

会誌『英語コーパス研究』第12号について

『英語コーパス研究』第12号の原稿を次の要領で募集いたします。会員各位の積極的な投稿をお待ちしております。

【原稿の種類】

1. 英語コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた「研究論文」、「研究ノート」
2. 「書評」、「コーパス紹介」、「ソフト紹介」、「海外レポート」、「論文紹介」などの各種情報あるいは紹介原稿

【投稿申込締切】2004年6月30日(水)

(氏名、所属、原稿の種類とタイトルを事務局までお知らせください。)

【原稿提出締切】2004年9月30日(木)

(ハードコピー4部およびフロッピーディスクを提出。)

【問い合わせ先・原稿提出先】

〒562-8558 大阪府箕面市粟生間谷東8-1-1
大阪外国語大学 地域文化学科ヨーロッパⅡ講座
大津智彦
TEL/FAX: 0727-30-5373 (直通)
Email:

【原稿の長さ】

1. 研究論文
英文 70 ストローク × 35 行 × 15 枚以内
和文 35 字 × 30 行 × 15 枚以内
(いずれも Abstract (英文) 注、書誌を含む。)
2. 研究ノートは 10 枚以下、その他は研究論文の半分以下。

【書式】第11号所収の論文を参考にしてください。詳細は学会ホームページ (<http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/Guidelines/style.html>) でご確認ください。

【採用通知】11月頃

【刊行予定】2005年3月25日

『英語コーパス研究』編集委員会

支部長就任挨拶と東支部活動予定

この4月より、山崎俊次先生の後任を務めさせていただくことになりました。なにとぞ、よろしくお願い申し上げます。

1998年の7月、当時の会長であられた齊藤俊雄先生、事務局の中村純作先生を中心に、数人の有志が集まり、東支部設立について会合が持たれました。東支部の活動としてそのとき話し合われたのは、大学教員のみならず、学生・中学校・高校の先生方を含めた研究会、コーパス活用の講習会などを、関東地区で開催してはどうかというものでした。翌年の4月まで設立準備会として活動し、1999年の4月の総会で東支部の発足が承認されて以来現在に至るまで、講習会を中心にした活動や関東地区での大会準備を行ってきました。御陰様で、東日本方面の会員数も増加してきたように思います。

今後の活動方針としましては、毎年開催されてきましたコーパス講習会の継続に加え、より活発な会員間の交流と研究発表の促進のために、気軽に参加できる研究談話会の開催を予定しています。積極的なご参加をお願いできればと思います。また、今後の東支部の活動を考えますと、特に東京地区で世話人としてご協力していただける先生の増強が必要と考えております。個別にお声をおかけすることがあるかと思いますが、その際はご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

東支部は、今後も、会長の中村先生、事務局長の赤野一郎先生のもと、東日本方面の会員の皆様の研究促進のために、努力して参りたいと思っています。今後の東支部の活動に関しまして、御要望、ご提案などがありましたら、どうかご遠慮なくご意見をお寄せください。東支部のホームページにつきましては、<http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaeacs/>をご参照ください。

東支部支部長 新井 洋一 (中央大学)

JAECs 創立10周年記念論文集について

大幅に遅れ、ご迷惑をおかけしている *English Corpora under Japanese Eyes: JAECs Anthology Commemorating its 10th Anniversary* ですが、Language and Computers Series の編集委員 Charles Meyer 先生と前編集主幹の Jan Aarts 先生に校閲を頂き、執筆者に結果をフィードバック、最終稿を提出していただきました。現在、完成本の形の PDF 版を作成中です。この PDF

版により Meyer 先生の最終チェックを受け、OK が出たらよいよ出版社 Rodopi に入稿です。

完成本は 5 つのセクションに別れ、掲載論文は以下の 12 本です。

I. Overview of Corpus-Based Studies

Corpus Linguistics—past, present, future: A view from Oslo
Stig Johansson

II. Corpus-Based Studies in Contemporary English

What is to be done about it? A Parallel Corpus Study of Copular and Infinitive Constructions in English and French
UCHIDA Mitsumi and YANAGI Tomohiro

Definite Notional Subject in Existential *There* Constructions: A Quantitative Study on the Use of ‘the + Noun Phrase’
Mayumi Nishibu

Patterns with Transitive Verb and Reflexive in English and their Counterparts in Japanese: A Bilingual Pattern Grammar Approach
Makoto Shimizu and Masaki Murata

Magnate and Tycoon: A Case of Rivalry between Existing Vocabulary and Newer Loanwords as Seen in OED2 and BNC
Makimi Kimura

A Corpus-Driven Identification of Distinctive Words: ‘Tabloid Adjectives’ and ‘Broadsheet Adjectives’ in the Bank of English
Satoko Takami

III. Historical and Diachronic Studies of English

A Project for a Comprehensive Collation of the Hengwrt and Ellesmere Manuscripts of *The Canterbury Tales*: General Prologue

Yoshiyuki Nakao, Akiyuki Jimura, and Masatsugu Matsuo
On Verb Movement in Old English Subordinate Clauses

Ohkado Masayuki
Syntactic Chronology: Dating Text in the History of English
Satoru Tsukamoto

IV. Corpus-Based Studies in English Literature

A Corpus-Based Approach to the Colour Terms Seen in the Novels by D. H. Lawrence
Shin'ichiro Ishikawa

V. Corpus and English Language Teaching

The Use of Past Tense Forms by Japanese Learners of English
Tomoko Kaneko

Measuring Vocabulary Levels of English Textbooks and Tests Using a BNC Lemmatised High Frequency Word List
Kiyomi Chujo

カメラレディの形での入稿ですので、出版までにはそんなに時間はかからないと思いますが、契約では入稿後、6 ヶ月ということになっています。できれば、秋の大会に間に合うよう出版社と交渉する予定です。ご期待下さい。

JAECs 創立 10 周年記念論文集編集委員会
中村 純作

新入会員紹介

JAECs Newsletter No. 44 (2004 年 3 月 15 日発行) 以降の新入会員の方は次の通りです(5 月 20 日現在、S は学生、敬称略)

夷石 壽賀子	麗澤大学大学院 S
岩井 千春	大阪大学大学院 S
内山 将夫	(独)情報通信研究機構
小野 隆啓	京都外国語大学
甲斐 雅之	京都女子大学
紙谷 一彦	大阪大学大学院 S
近藤史子	パーミンガム大学大学院 S
進藤 三佳	(独)情報通信研究機構
寺島 啓子	名古屋大学大学院 S
寺内 一	高千穂大学
トウメイ・ジョセフ	熊本学園大学
徳元 俊介	京都大学大学院 S
杼原 均	三重県立神戸高校
中村 美紀	立命館大学大学院 S
舟木 てるみ	高千穂大学
船城 道雄	奈良教育大学
水島 孝司	東京海洋大学
望月 通子	関西大学
山田 洋文	青山学院大学 S
吉田 雅之	早稲田大学
和田 園子	大阪大学大学院 S

事務局から

年会費納入のお願い

2004 年度会費(一般 5,000 円、学生 3,000 円)未納の方には郵便振替用紙を同封致していますので、6 月末日までにお納め下さい。6 月末日までに文書による退会申し出がない限り、今年度も会員を継続されるものと了解致します。

郵便局発行の受領証をもって領収書に代えさせて頂きます。なお領収書が必要な方は、80 円切手を同封の上、高橋薫(〒471-8525 愛知県豊田市栄生町 2-1 豊田工業高等専門学校)までお申し出下さい。振替用紙の通信欄によるお申し出はご遠慮下さい。

2003 年度会費未納の方は、2004 年度分と併せてお納め下さい(振替用紙にその旨記しております)。行き違いになりました場合は、何とぞご容赦下さい。2 年続けて会費未納の場合、JAECs Newsletter などの送付を中止させて頂きます。

住所、所属等に変更や異動のある方は、必ず通信欄にお書き添え下さい。

その他

事務局では、シンポジウムやワークショップの企画・アイデアを随時募集しております。英語コーパス学会の大会プログラムとしてふさわしい内

容のものがありましたら、どしどしご提案下さい。

FORUM 欄への投稿もお待ちしております。海外の学会・研究の動向、新刊・近刊図書の紹介、身近なコーパス研究のエピソード等でも結構ですのでお寄せ下さい。

FORUM

国会議事録、判決文、話法、コミュニケーション

鳥飼慎一郎（立教大学）

最近あらゆる文書がデジタル化され、何万語もの言語資料が容易に手に入るようになったが、そのような資料の一つに海外の立法府での討議の様子を記録した議事録あるいは裁判所の判決文がある。その代表的な例として、イギリスの国会（Parliament）のサイト <http://www.parliament.the-stationery-office.co.uk> をご紹介したい。このサイトに [pa/cm/cmhansrd.htm](http://www.parliament.the-stationery-office.co.uk/pa/cm/cmhansrd.htm) を追加して開くとイギリス国会での法案審議の詳細な議事録を見ることができる。この議事録は正式には Hansard と呼ばれるものであるが、この語の由来は、もともと 1811 年から 1889 年まで国会で議事録を取り、それを出版することを賄いとしていた Hansard 家から来ている。ちなみに、イギリスでは裁判所の判例集の編集販売も 1885 年までは私的な業者が行っていた。この Hansard は国会での討議の様子を *verbatim* に記録したものであり、話し言葉でのやり取りをかなり忠実に再現しているのが特徴である。

上記の公式サイトにある House of Lords をクリックしてみると、大法官（Lord Chancellor）が議長を務めるイギリス国会の上院である貴族院（House of Lords）の公式サイトに至る。イギリスはこれまた面白いことに、この上院が現在でも最高裁判所を兼ねているのであり、上院の議長である大法官が最高裁判所の長官を兼ねるのである。三権分立が徹底していないのが伝統の国イギリスらしいといえばイギリスらしい。上記の公式サイトに [pa/ld199697/ldjudgmt.htm](http://www.parliament.the-stationery-office.co.uk/pa/ld199697/ldjudgmt.htm) を加えると、貴族院が下した過去およそ 10 年近くの判決文を見ることができる。

さて、その判決文であるが、法律用語が難解である、1 文が長くて構造が複雑である、など読みにくい英語の代名詞のように言われているが、ある程度慣れ

てしまうと、むしろ論理的で曖昧さが無く、明快な英語の文章の好例ではなからうかと思えてくる。

この判決文をデータにして、私はこの数年来、言葉によるメッセージの伝達形式を研究している。判決文には様々な人間の証言、法律の文言、先例となる判例からの引用が、話法という文法形式でふんだんに用いられている。これらの話法の文法形式を研究することで、引用文ではどのような要素から切り捨てられていくのか、あるいは何が最後まで残るのか、簡略化の過程でどのような文法形式が出現するのかなどが分かり、メッセージの伝達に中心的役割を果たす言語要素、あるいはその構造が明らかになると考えるからである。判決文は、このような研究にも耐えられるだけのしっかりとした論理構成を持つ英文である。御一読をお勧めするしだいである。

コーパスを使った客観的な研究の重要性

地村彰之（広島大学）

2003 年のクリスマスから 2004 年の新年にかけてのことでした。オックスフォード大学で在外研究中（2003 年 6 月 30 日～2004 年 4 月 29 日）の私のところに The Society for New Language Study の機関誌 *In Geardagum* XXIV (2003, ISBN 0-936072-37-7) が送られてきました。書評欄にデンバー大学 Alexandra H. Olsen 教授が、私たちの出版した書物 (Jimura, A., Y. Nakao, M. Matsuo, eds. *A Comprehensive Textual Comparison of Chaucer's Dream Poetry* (Okayama: University Education Press, 2002) の書評をしておられました (pp. 81-83)。中世英語英文学の研究をしておられる人以外はあまり読まれない雑誌ですので、この場をお借りしてその一部をご紹介します。“*A Comprehensive Comparison of Chaucer's Dream Poetry* will show scholars the differences among editions and help them determine whether they need to consult the manuscripts. ... This study will contribute to the textual criticism of Chaucer's dream poetry and make possible new and persuasive literary judgments, helping inaugurate a new and valuable era of Chaucer studies. This book is a valuable and well presented study which will be of benefit to Chaucer scholars around the world. Chaucerians owe the editors a debt of gratitude.” (pp. 82-83) 今までコンピュータを使って、客観的なコーパス言語研究を実践してきたことが、無駄ではなかったことを知りました。ほんとうにうれしいクリスマスプレゼントであり、お年玉でした。

英語コーパス学会 Newsletter No. 46

Sept. 1, 2004

■会長：中村 純作
■事務局：〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6 京都外国語大学 赤野一郎研究室
■TEL：075-322-6103 ■郵便振替口座：00940-5-250586 (英語コーパス学会)
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■E-mail: i_akano@kufs.ac.jp

JAECS
Japan Association for English Corpus Studies

第24回大会のご案内

英語コーパス学会第24回大会は、10月2日(土)日本大学文理学部で開催されます[〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40 京王線下高井戸あるいは桜上水下車、徒歩8分 <http://www.chs.nihon-u.ac.jp/>]。会場校および運営委員である塚本聡先生のご尽力に感謝致します。

詳しくは、同封の「大会資料」をご覧くださいなのですが、今大会では恒例の午前中のワークショップのほか、研究発表2件と実践報告1件、およびシンポジウムを準備いたしました。

研究発表につきましては、運営委員会の査読を経て、7月17日(土)に日本大学文理学部で開かれた大会準備委員会審査しました結果、後藤一章氏(大阪大学大学院生)の「N-gram から見るBNC のテキストジャンル間の相異」と田中省作(九州大学情報基盤センター)、藤井宏(九州大学大学院生)、富浦洋一(九州大学大学院)、徳見道夫(九州大学大学院)の4氏による共同研究「品詞 n-gram 分布に基づくNS/NNS論文の分類モデルと日本人英語科学技術論文の特徴抽出」の2件と、梅咲敦子氏(立命館大学)の実践報告「英語学習のための大規模コーパス利用」が選ばれました。

23回大会でもn-gramを使った研究発表がありましたが、今回は2つの研究発表のいずれにもこのツールが使われています。今後もますますこのツールが活用されるものと思われます。また今回からの初めての試みですが、教室内でのコーパス活用に関する実践報告が行われます。ご期待ください。

シンポジウムでは、「コーパスと言語理論 コーパスは言語理論にいかに関与しうるか」と題して、深谷輝彦氏(椋山女学園大学)をコーディネーター・司会者に、小野隆啓氏(京都外国語大学)、早瀬尚子氏(大阪外国語大学)、田中廣明氏(関西外国語大学)を講師にお願いしました。深谷先生の言葉を借りますと、「コーパスと言語理論の生産的な関係とは何か、理論研究を推進するために今後どのようなコーパスを構築し、どのような検索が期待されるのか、という問題について理論言語学者の立場から建設的提案」を行っていただきます。

恒例となっております午前中のワークショップでは、前回のアンケートで希望の多かった統計処理を採り上げ、田畑智司氏(大阪大学)を講師に「コーパス言語学のための多変量解析入門」を企画いたしました。「多変量解析」というと難しそうですが、背景にある理念や、データ・グラフの見方、手法の長所・短所などについて、初心者向けに解説していただきますので、奮ってご参加ください。

参加御希望の方は、電子メールで、所属と会員・非会員の別を明記の上、事務局宛にお申し込み下さい(件名「ワークショップ申込」)。先着50名で締め切らせて頂きます。英語コーパス学会の会員であれば参加費は無料です(非会員の場合は当日会費1,000円)。

『英語コーパス研究』第12号について

『英語コーパス研究』第12号(2005)の原稿を募集しましたところ、論文6件、書評1件の申し込みがありました。積極的なご応募をいただき有難うございます。なお、執筆申し込みをされていない会員の方も、原稿締め切りの9月末日までに論文等を送付いただければ、審査の対象となりますので、ぜひとも奮ってご投稿下さい。お待ちしております。なお、投稿規定は以下をご覧ください。

http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/Guidelines/ECS_SGuide-j.html をご覧ください。

『英語コーパス研究』編集委員会委員長
大津 智彦(大阪外国語大学)

10周年記念論文集の予約申し込みについて

English Corpora under Japanese Eyes: JAECS Anthology Commemorating its 10th Anniversary は予定より1年遅れ、オランダのRodopiからLanguage and Computersのシリーズの51巻として刊行予定で、現在印刷中です。内容は先にJAECS Newsletter No. 45でもお知らせしましたが、目次は以下の通りです。

Mitsunori IMAI: Foreword

Junsaku NAKAMURA, Nagayuki INOUE and Tomoji

TABATA: Preface

I. Overview of Corpus-Based Studies

Stig JOHANSSON: Corpus Linguistics – past, present, future: A view from Oslo

II. Corpus-Based Studies in Contemporary English

Mitsumi UCHIDA and Tomohiro YANAGI: *What is to be done about it?* A Parallel Corpus Study of ‘Copula and Infinitive’ Constructions in English and French

Mayumi NISHIBU: Definite Notional Subject in Existential *There* Constructions: A Quantitative Study

Makoto SHIMIZU and Masaki MURATA: Patterns with Transitive Verb and Reflexive in English and their Counterparts in Japanese: A Bilingual Pattern Grammar Approach

Makimi KIMURA: *Magnate* and *Tycoon*: A Case of Rivalry between Existing Vocabulary and Newer Loanwords as Seen in *OED2* and *BNC*

Satoko TAKAMI: A Corpus-Driven Identification of Distinctive Words: ‘Tabloid Adjectives’ and ‘Broadsheet Adjectives’ in the *Bank of English*

III. Historical and Diachronic Studies of English

Yoshiyuki NAKAO, Akiyuki JIMURA, and Masatsugu MATSUO: A Project for a Comprehensive Collation of the Hengwrt and Ellesmere Manuscripts of *The Canterbury Tales*: The General Prologue

Ohkado MASAYUKI: On Verb Movement in Old English Subordinate Clauses

Satoru TSUKAMOTO: Syntactic Chronology: Dating Text in the History of English

IV. Corpus-Based Studies in English Literature

Shin'ichiro ISHIKAWA: A Corpus-Based Approach to Basic Colour Terms in the Novels of D.H. Lawrence

V. Corpus and English Language Teaching

Tomoko KANEKO: The Use of Past Tense Forms by Japanese Learners of English

Kiyomi CHUJO: Measuring Vocabulary Levels of English Textbooks and Tests Using a BNC Lemmatised High Frequency Word List.

総ページ数 249 ページで、価格は EUR 55、あるいは US\$ 69 です。9 月下旬に印刷が終了する予定ですので、10 月 2 日の大会時に会場で販売することが可能だと思われます。JAECS 会員にはこの会場での販売に限り執筆者と同じ 40%OFF でお買い求め頂けます。航空便での送料を含み 1 冊あたり 5,150 円（8 月 20 日現在）です。ただし、販売予定冊数を事前に確認したいと思いますので、中村の E-mail アドレス (jnakamur@gr.ritsumeimei.ac.jp) まで、氏名、購買予定冊数をお知らせ下さい。締め切りを 9 月 10 日とし、大会当日現金と引き換えにお渡しする予定です。

JAECS の 10 周年記念行事として 2000 年から取り組んできました記念論文集の刊行が、1 年遅れでようやく完了となります。最終的な刊行を確認した上

で、我々編集委員会もその任務を終了したいと思っております。投稿いただいた執筆者の先生方はもちろんのこと、会員諸氏には長らくお待たせし、ご迷惑をおかけしたことをお詫びすると同時に、査読を通じてご協力いただいた数多くの先生方に厚くお礼を申し上げます。

JAECS 創立 10 周年記念論文集編集委員会

中村 純作（立命館大学）

井上 永幸（徳島大学）

田畑 智司（大阪大学）

学会賞応募規定

第 4 回の学会賞を募集致します。応募規定は次の通りです。

【対象】英語コーパス学会の目的に照らし、英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績をあげた学会員（個人またはグループ）とする。ただし、奨励賞は応募期限日において 35 歳以下の個人に限る。

【応募方法】自薦、他薦を問わない。

【提出書類】1) 同封の推薦理由書。
2) 対象となる研究業績の現物またはコピー。

【提出先】事務局

【応募期限】2005 年 3 月 31 日

【発表】2005 年度秋季大会

JAECS 東支部活動報告と研究談話会のご案内

2004 年度第 1 回英語コーパス学会東支部主催の講習会が、以下の要領で開催されました。

テーマ：アメリカ映画を利用したマルチメディア・コーパスの構築

講師：佐藤弘明（専修大学）

開催日時：2004 年 8 月 10 日（火）14:00～15:30

開催場所：専修大学生田キャンパス

講習会では、佐藤先生が 10 年以上にわたって独自に構築されてきたアメリカ映画のデータベースに基づいて、特に、出演者の台詞通りのデータの取得法、タイムコードの調整法、同一映画の他言語コーパスの構築法、検索結果とリンクした映像呼び出し、などについて興味深い解説がおこなわれました。夏休み中のこともあり、参加者は 10 名ほどでしたが、映画や話し言葉に強い関心がある方々に集まっていたにせいか、質問やコメントも途切れることなく続き、講習時間も、2 時間半の予定が 1 時間以上オーバーすることになりました。熱心に講師を務めていただいた佐藤先生には、心より感謝申し上げます。

また、すでにメーリングリストでご案内しましたように、第1回英語コーパス学会東支部研究談話会を以下の要領で開催いたします。多くの会員のみならず、さまざまな積極的なご参加を、お待ち申し上げております。

日時：2004年9月11日(土) 13:30 - 18:00

場所：中央大学 後楽園キャンパス(理工学部)

3号館 14階 中会議室1

http://www.fse.chuo-u.ac.jp/guide/00_guid.html

参加費：無料

発表内容：

山崎俊次(大東文化大学)「ICAME2004 報告」

見目卓之(北海道大学大学院生)

「BNC を利用した同族目的語構文と軽動詞構文の記述的研究」

千葉 庄寿(麗澤大学)

「XML 関連技術を利用した用例検索ツールの開発」

吉村由佳(慶応大学非常勤)

「コロケーションをどう教えるか - 授業へのコンコーダスラインの導入例」

会場へのアクセス方法

地下鉄丸の内・南北線「後楽園駅」から徒歩5分、都営三田線・大江戸線「春日駅」から徒歩7分、JR 総武線(中央線と併走)「水道橋駅」から徒歩15分

JA ECS 東支部支部長
新井洋一(中央大学)

新入会員紹介

JA ECS Newsletter No. 45(2004年5月25日発行)以降の新入会員の方は次の通りです(8月20日現在、Sは学生、敬称略)。(個人の住所および電話番号は、オンライン版のニューズレターでは公開していません。郵送されるニューズレターをご覧ください。)

石田 基広 徳島大学

岡田 清美 関西大学大学院 S

田畑 義之 九州大学

森永 弘司 立命館大学大学院 S

住所・所属等の変更

河上 誓作

東海林宏司

名簿訂正のお願い

会員名簿(改訂版)の記載内容に誤りがございません。事務局の勝手にお詫びいたしますとともに、以下のようにご訂正ください。

小野 真嗣

清水 眞

寄贈刊行物の紹介(到着順)

Yaguchi, M. Y. Iyeiri, and H. Okabe. 2002. "Do Men Talk More than Women in Academic Situations?: An Analysis of the Corpus of Spoken Professional American English". 『摂南大学国際言語文化部 摂大人文学』(The Setsudai Review of Humanities and Social Science) 10:95-108.

Iyeiri, Y. 2003. "'God forbid!': A Historical Study of the Verb forbid in Different Versions of the English Bible". *Journal of English Linguistics* 31: 149-62.

Iyeiri, Y. 2002. "The Development of Non-assertive Any in Later Middle English and the Decline of Multiple Negation", in *And gladly wolde he lerne and gladly teche: Essays on Medieval English Presented to Professor Matsuji Tajima on his Sixtieth Birthday*, ed. Yoko Iyeiri & Margaret Connolly, pp. 127-43. Kaibunsha.

Iyeiri, Y. 2002. 「Prohibit に関わる構文の歴史的発達について—History of the English Verb to prohibit—」 『英語史研究会会報』(The Bulletin of the Japanese Association for Studies in the History of the English Language) 8: 1-4.

山内伸幸. 1997. 「How to Use *Access to* - access の新しい語義記述をめざして - 」 『同志社大学英語英文学研究』 68号 309-327.

齊藤俊雄. 2003. 「初期近代英語における関係詞 The Which の衰退について」 『外国語学研究』 第4号 104-115(大東文化大学大学院外国語学研究科)。

齊藤俊雄. 2004. 「"The Humble Petition of WHO and WHICH" を検証する」 『英語史研究会会報』 第11号, 1-5.

中島浩二. 2002. "A Corpus-based Analysis of the Auxiliary Verb NEED in American, British and Australian Newspaper English" *Lingua*, 22: 61-75.

Hori, M. 2004. *Investigating Dickens' Style: A Collocational Analysis*. Palgrave Macmillan.

吉村耕治(編著) 2004. 『英語の感覚と表現—共感覚表現の魅力に迫る』 三修社.

Hiltunen, R. and S. Watanabe (eds.) 2004. *Approaches to Style and Discourse*. Osaka University Press.

メールアドレスの削除について

プライバシーへの考慮と、スパムメールへの対処のために、JA ECS サイトから提供する文書の中に直接表記されているメールアドレスを削除いたしました。Newsletter など、過去の文書中のアドレスには、役員の変更や、勤務先・所属の変更によって、実際には使われていないアドレスも多くありますので、その整理の意味もあります。変更前の文書は別途保存してありますので、参照の必要がありましたら、ホームページ管理者までご一報ください。

運営委員・ホームページ管理担当

西納春雄（同志社大学）

事務局から

年会費納入のお願い

2004 年度会費（一般 5,000 円、学生 3,000 円）未納の方には郵便振替用紙を同封致しておりますのでお納め下さい。郵便局発行の受領証をもって領収書に代えさせていただきます。なお、住所、所属等に変更や異動のある方は、通信欄に記入する際、必ず冒頭に「住所変更」「所属変更」と明記してください。

2003 年度会費未納の方は、2004 年度分と併せてお納め下さい（振替用紙にその旨記しております）。行き違いになりました場合は、何とぞご容赦下さい。2 年続けて会費未納の場合、Newsletter などの送付を中止させていただきます。

その他

事務局では、会員名簿のできる限り正確な管理に努めております。誤りや変更がございましたらご一報ください。

FORUM 欄への投稿もお待ちしております。海外の学会・研究の動向、新刊・近刊図書の紹介、身近なコーパス研究のエピソード等でも結構ですでお寄せ下さい。

FORUM

通時コーパス情報を 2 つほど

齊藤俊雄（大阪大学名誉教授）

最近、『英語コーパス言語学』（研究社）の改定作業の過程で通時コーパスについて知ったことを 2 つほど記して、参考に供したい。

1 つは、Pennsylvania 大学の Beatrice Santorini 博士からのメールによると、同大学編纂の Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (180 万語) が今年末にリリースされるとのことであり、また York 大学の CEEC を使った Parsed Corpus of Early English Correspondence (PCEEC) (200 万語) が来年完成する予定である。

ご存知のように、Pennsylvania と York の両大学が、Helsinki 大学の協力を得て、英語史全時代の構文解析コーパス開発計画を遂行中で、すでに OE では York-Helsinki Parsed Corpus of Old English Poetry (HC の韻文部分、約 7 万語)、York-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose (YCOE) (Brooklyn Corpus に代わる拡張版、150 万語) が、ME では Penn-Helsinki Parsed

Corpus of Middle English, 2nd edn. (PPCME2) (PPCME1 に代わる拡張版、130 万語) が公開済みである。

これで、PCEEC を除いて考えても、Helsinki Corpus の 3 倍の大きさの英語史コーパスが実現することになる。また Santorini 博士によれば、Pennsylvania 大学で後期 ModE の構文解析コーパス開発計画（当初は 100 万語規模）が発足しようとしている。

これが完成すれば、英語史全時代をカバーする数百万語規模の構文解析コーパスになる。Helsinki Corpus の規模の小ささと後期 ModE の欠如を嘆いてきた私のような英語史研究者には、確かに、これは通時コーパス言語学の新しい時代の到来を告げるもののように感じられる。

2 つ目は、Lancaster 大学で昨年 Leverhulme Corpus Project（英国英語の 1931 年刊行資料を集めた LOB のクローン）が始まったことである（来春完了予定）。それ自体は通時コーパスではないが、‘Pre-LOB’ (1931), LOB (1961), FLOB (1991) で 20 世紀英国英語の書き言葉の変化を調査する目的である。これと、新井洋一先生が Newsletter No.44 で紹介された Diachronic Corpus of Present-day Spoken English (DCPSE)（本年 8 月完成予定）が出揃うと、4 つのコーパスで面白い通時的研究ができそうである。もっとも、1931 年あたりの話し言葉資料はないであろうから、

Pre-LOB に相当する話し言葉のコーパスはできないであろう。

ますますコーパスによる通時的研究も面白くなってきたようである。

ICAME 2004 に参加して

清水 眞（東京理科大学）

5 月 19 日から 23 日にイタリアのヴェローナ (Verona) で開催された ICAME2004 に参加した。日本からは、山崎俊次先生（大東文化大学）、高橋薫先生（豊田高専）、滝沢直宏先生（名古屋大学）、私の共同研究者の村田真樹氏（情報通信研究機構）、私、そして、在外研究中のイギリスから、久保田俊彦先生（明治大学）が出席した。村田氏を除くと、全員が英語コーパス学会の会員である。

本年は、ICAME 設立 25 周年であり、大会は“Corpus Linguistics: The State of the Art Twenty-Five Years on”と題された。Jan Svartvik、Stig Johansson（敬称略）等の講演、Geoffrey Leech、John Sinclair 等のパネルディスカッションと、著名な研究者がコーパス言語学の過去を回顧し、未来を展望した。LOB、Birmingham Corpus の編纂時の事情、ICAME 設立の際の逸話等の興味深い話を聞き、編纂中のコーパスの紹介をはじめ

めとする現在の研究を俯瞰し、これからの方向性を考えることができた。

研究発表は、従来通り、モノリンガルコーパスを用いた、語彙、語法、文法研究が盛んに行われた。それに加えて、最近の傾向として、ふたつの新しい流れが顕著であったように思う。バイリンガル(あるいはマルチリンガル)コーパスの使用と特定分野への限定である。特に、英伊語の法律のコーパス、英伊語の旅行・観光のコーパスの編纂とその応用に関して、いくつかの研究発表がなされたが、興味深いものであった。

日本からの参加者の発表は5件あった。山崎先生の発表は、異なるコーパス間、異なるカテゴリー間における形容詞の統語的機能の比較についてであった。村田氏は、辞書を用いて行った英語品詞間の転換に関する発表を行った。高橋先生の発表は、“A study of register variation in the British National Corpus”という題で、BNCを用いた研究である。私と村田氏は、パラレルコーパスを用いて、日英語の他動詞+再帰形/代名詞のパターンの比較について論じた。滝沢先生の発表は、“Some remarks on the haven't NP in American English”であった。

発表会場のみならず、コーヒーブレイク、昼食、ディナー、ツアーと、いつでもどこでも白熱した議論が繰り広げられていた。私も、オープニングレセプションのディナーで隣り合わせになったリヴァプール大学のAntoinette Renouf、ツアーの船の中で近くに座っていたテル・アヴィヴ大学のMira Arielと意見の交換を行うことができた。Arielは、再帰形の研究に関して世界的に知られた研究者であるので、特に幸運であった。



研究発表での真剣な討論とともに、ディナー、ツアーも、大会の有意義な側面である。3回のディナーは、歴史的、文化的に興味深い場所で開かれ、料理、ワインともに堪能した。ツアーでは、ヴェローナ市内とヴェローナに近いガルダ湖を訪ねた。市内には古代ローマの円形闘技場が現存しているが、そこで、古代ローマの剣闘士に扮した研究者より、解説を聞くことができた。「よく学び、よく遊べ」という趣の大会であった。

第9回北欧英語学会(NAES)参加報告

渡部眞一郎 (大阪大学)

三年毎に開催される北欧英語学会(NAES)の第9回大会が今年の5月27日から29日にかけて、デンマークのオーフス(Aarhus)大学で開催されました。この学会は本来の北欧五カ国の範囲をはるかに越えて、英米を含む世界各地からの参加者も数多く、近年、国際性の度合いをいちだんと強めてきています。日本からは今井光規教授(摂南大)と私、渡部の二人が参加し、コーパス言語学の分野に関わる研究発表を行いました。

初日27日の開会式はとてもなごやかな雰囲気の中に執り行われました。まず、大会委員長で本学会の現会長でもあるTim Caudery教授(オーフス大)の挨拶があり、その後、初代会長で長く会長を務めたArne Zettersten教授(コペンハーゲン大)の功労を称える記念品が現会長からご本人に授与されました。Zettersten先生は本学会がいまや貢献度の高い国際的な学会に成長してきたことを述べられるなかで、過去何回も参加してきた今井教授と私が国際化に果たしてきた役割を説明しながら、私たちの名前を挙げて歓迎のことばを表されたのには大変驚きました。

初日の午後には、さっそく今井先生の口頭発表(How a Line Begins in Middle English Metrical Romances)があり、活発な質疑応答が行われました。発表後、今井先生と二人でオーフスのレストランに行き、乾杯をしましたが、その時に私が初めて食した酢漬けのヘリングの味の濃密さがいまだに忘れられぬものとなっています。

二日目の28日の午前中には渡部が口頭発表(日英福音書における固有名詞「イエス」, 'Jesus'の反復について)を行いました。久しぶりの英語による口頭発表でかなり緊張してしまいましたが、出席者も多く、予想以上の詳細で実質的な質疑応答になりました。良い反応が得られ、とてもよい経験となりました。

本大会のプログラム資料によれば、総勢189名の参加者があり、文学から語学、英語教育、文化学まで幅広いテーマの研究発表がありました。特に、語学の発表ではコーパス言語学の方法を用いた研究発表が数多くあり、とても良い雰囲気の中に口頭発表が行われ、素晴らしい大会となりました。コーパス言語学関係の発表の例として、タイトルを1, 2挙げておきます。“Editing the Internet: Constructing E-books for the English Classroom”, “Visual Interactive Syntax Learning: Computer-assisted instruction at the tertiary level”.

韓国英文学会創立 50 周年記念国際大会「コーパス言語学セッション」に参加して

石川慎一郎（神戸大学）

日本の英文学・英語学分野においてもっとも大きな学会の一つは日本英文学会であるが、それに相当する組織として、韓国には韓国英文学会がある。同会はこの度創立 50 周年を迎え、2004 年の 6 月 15 日から 18 日にかけてソウル郊外の Academy of Korean Studies において記念の国際大会が盛大に開催された (http://www.ellak.or.kr/ellak-eng/eng_frame.htm)。

大会では、英文学・英語学を含む多様なセッションがあり（総発表件数は約 200 件）、ほぼすべてのセッションにおいて海外から講師・発表者が招待された。日韓の学会間につながりがある場合は日本の学会に招聘がなされ、例えば日本英文学会、日本音声学会、日本ロレンス協会などからも代表者が派遣された。

コーパス言語学については、韓国側に全国学会が組織されていないという事情があるのか、国籍を問わず、国際公募で発表者を募集することになった。幸いプロポーザルが採用され、日本からは、小生と石川（中尾）有香氏（広島国際大学）の二名が「コーパス言語学セッション」の招待発表者として参加した。

記録として、以下、関係の講演・発表内容をご紹介しておく。紙幅の関係上、発表者と題目のみの紹介となることをお許しいただきたい。

まず基調講演として、Antoinette diPaolo Healey 氏 (University of Toronto) が“Use of New Technologies in English Studies in Canada”の題で古英語オンライン辞書の開発について報告。Matti Juhani Rissanen 氏 (University of Helsinki) は“Computerized Corpora and the Study of the History of English”の題で歴史言語学研究におけるコーパスの可能性と限界について報告。Bas Aarts 氏 (University College London) は“Messy or orderly: the nature of linguistic categories”の題で言語事象のコーパス解析例について報告。

次に「コーパス言語学セッション」での発表として、Bas Aarts 氏は“Recent Developments in Corpus Linguistics”の題で開発中のプログラムを紹介。Noel Dirk 氏 (Ghent University) は“John was seen to leave: A corpus investigation of a passive perception verb complemented by a to-infinitive”の題で知覚動詞の受動構文について報告。Sung-Ho Ahn 氏 (Hanyang University) は“The Hanyang Corpus of Learner English: Emergence of a Learner English Corpus in Korea”について、Xunfeng Xu 氏 (Hong Kong Polytechnic University) は“The Use of a Learner Corpus for the Training of English Teachers”について報告。学習者コーパスはアジア各地で関心を集めているようである。Susan W. Brown 氏 (University of Colorado) & Mary A. Whitmire 氏 (University of Colorado) は“A Corpus-Based Tool for the

Generation of EFL Practice Set”について、Hyuk-Seung Kwon 氏 (Seoul National University) は“Collocation: teaching, learning and testing”について報告。教育的採用への関心も高い。Michael Barlow 氏 (University of Auckland) は“Practical Corpus Linguistics and Language Analysis”の題で自身が担当するコーパス講座の概要と自作ソフトウェアのデモを実施。石川は“A Corpus-based Approach to the Synonymic Words of ‘Sorrow,’ ‘Grief,’ and ‘Sadness’”の題で、コーパス解析が微妙な同義語の意味の切り分けに役立つことを報告。Cho Euiyon 氏 (Dongguk University) は“Teaching English Lexical Semantics with CALL-based Concordances”の題で報告。Yuka Ishikawa 氏 (Hiroshima International University) は“The Usage of Gender-Specific Words”の題で英米コーパスの性差特定表現の量的比較結果を報告。Kap Hee Lee 氏 (Seoul Theological University) は“Due to and Based on: A Corpus-based Case Study in Adverbialization”の題で BROWN 他分析に基づく調査内容を報告。そのほか「社会言語学セッション」の発表として、Hikyong Lee 氏 (Korea University) は“Stylistic Variation in English Contraction Use Across Different Writing Modes”の題で学習者コーパスの解析結果を精緻な統計分析とともに報告。Suying Yang 氏 (Hong Kong Baptist University) & Zhu Xiaomei 氏 (Anhui University) は“On-line Communication and its Impact on Hong Kong Learner’s Use of English”の題で香港学生のオンラインチャットコーパスの分析結果を報告。全体で関連発表は 20 件近くに上った。

多様な発表を聞き、またパーティやエクスカージョンで世界の参加者と討議を深め、コーパス言語学の大きな可能性を改めて認識した 3 日間であった。韓国の英語コーパス研究は年々盛んになりつつある。本学会においても、欧米に加えて、今後はアジア各国のコーパス研究者との連携を深めていく必要があるのではないかと強く感じた。

なお、大会プロシーディングズおよび各氏のハンドアウトは小生の手元にあります。ご関心があれば小生宛メールにてご連絡いただければと存じます。

英語コーパス学会 Newsletter No. 47

Dec. 9, 2004

■会長：中村 純作
■事務局：〒615-8558 京都市右京区西院笠目町6 京都外国語大学 赤野一郎研究室
■TEL：075-322-6103 ■郵便振替口座：00940-5-250586 (英語コーパス学会)
■URL: <http://muse.doshisha.ac.jp/JAECS/index.html> ■E-mail: i_akano@kufs.ac.jp

JAECS
Japan Association for English Corpus Studies

第24回大会報告

概要

英語コーパス学会第24回大会は、10月2日(土)日本大学文理学部で開催されました。当日は天候にも恵まれ、事務局の調べでは会員の参加者84名、新入会員2名、当日会員25名、賛助会員1名の合計112名の参加があり、この数は今までに関東で開催された大会で最も多いものでした。

恒例になっております午前中のワークショップは「コーパス言語学のための多変量解析入門」と題して、大阪大学の田畑智司氏に講師を務めて頂きました。多変量解析の主要な解析方法(コレスポンダス分析・主成分分析・クラスター分析)を概観し、それぞれの特徴、違いなどの詳細な説明の後、統計解析言語Rの実習が行われました。「初心者にもわかりやすい」、「大変意義のあるワークショップだった」等のアンケートの回答もあり、密度の濃い内容のワークショップに45名の参加者が熱心に取り組みました。<http://cobalt.lang.osaka-u.ac.jp/~tabata/JAECS2004/JAECS2004hand.pdf> にアクセスして頂くと、当日の資料がハイパーリンク付きのPDFファイルで御覧になれます。統計解析言語Rを用いたセッションについても大会時より詳しく記述していただきました。

午後の大会では、中村純作会長(立命館大学)の開会の挨拶のあと、開催校を代表して、日本大学文理学部長の島方洸一先生からお言葉を頂きました。その後、英語コーパス学会賞選考委員長の中尾佳行先生(広島大学)より、第3回の学会賞には残念ながら応募者がなかったことが報告され、第4回への積極的な応募の呼びかけがありました。4頁に応募規定を掲載しておりますので、奮ってご応募ください。

引き続き2件の研究発表、1件の実践報告およびシンポジウムが行われました。概要につきましては、司会の先生にご執筆頂きました「研究発表報告」、「実践報告」、「シンポジウム報告」をご覧ください。

大会終了後の懇親会には40名の会員の参加がありました。小林多佳子先生(昭和女子大学)の当意即妙な司会のもと、中村会長のご挨拶と学会顧問の齊藤俊雄先生の乾杯のあと、会員同士の交流と情報交換が行われました。来年の秋期大会開催校である昭和女子大学の金子朝子先生のスピーチなどを交え、大いに盛り上がり午後8時にすべての大会行事が終了いたしました。

「スムーズな大会運営だった」、「会場が良かった」などのアンケートのご回答を頂きました。これも、開催校である日本大学文理学部の塚本聡先生と秋山孝信先生の献身的なお力添えがあつてのことでした。また、百周年記念館2階の国際会議場という素晴らしい場所をご提供いただいた日本大学文理学部にも、この紙上を借りて厚くお礼申し上げます。学生の皆さんにも、会場準備、受付などのお手伝いを頂き大変お世話になりました。お礼申し上げます。

研究発表

N-gram から見る BNC のテキストジャンル
Unclassified に含まれるテキストのジャンル推定に
向けて

後藤一章(大阪大学大学院)

本発表は、Lee(2001)が言語外的特徴に基づいて行ったBNCのジャンルの分類に関して、n-gramという言語内的特徴に基づく分析の可能性を検討した。ジャンルごとに、連続する2つの品詞タグによるbi-gramの頻度を出し、コレスポンデンス分析を行い、それぞれのジャンルの特徴を明らかにしたのみならず、Lee(2001)では未分類とされているテキストの位置付けも明らかにした。午前中のワークショップでコレスポンデンス分析が取り上げられたこともあり、分析結果の軸の解釈に関して盛んに質疑応答が行われた。田畑先生による軸の解釈の提案、中村会長によるBiber(1988)の分類の批判、岡田毅先生(東北大学)による句読点の重要性の指摘などがあつた。

杉浦正利(名古屋大学)

品詞 n-gram 分布に基づく NS/NNS 論文の分類モデルと日本人英語科学技術論文の特徴抽出

田中省作(九州大学)・藤井宏(九州大学大学院生)・富浦洋一(九州大学)・徳見道夫(九州大学)

本発表は、品詞 tri-gram 分布に基づき、日本人が書いた英語論文であることを強く示唆するパターンを抽出し、それぞれの品詞パターンをとる表現を具体的に分析することで、日本人英語学習者が英語論文を書く際に注意すべき点(構文・時制・個別の語法等)を明らかにした。工学系の自然言語処理分野における分析手法を英語教育に応用した意欲的な研究で、英語教師が経験的に知っていることを、客観的なデータと分析手続きにより裏付けることができることを示した点で意義がある。工学系の自然言語処理研究者と英語学・英語教育の研究者との協力により、今後、さらに緻密な分析と広がりをもつと期待される。

杉浦正利(名古屋大学)

実践報告

英語学習のための大規模コーパス利用

梅咲 敦子(立命館大学)

コーパスを大学の学部英語教育に利用した興味深い実践報告であった。British National Corpus(BNC)のような大規模コーパスを一般英語教育に利用する利点として、学生は多くの authentic な例に出会うが、その反面、用例解釈の難しさと不要な用例のマイナス点がある。しかし自立学習を狙いとして、梅咲氏は1年生と2年生以上の4つのリーディングクラス(各28-30名)にコーパス利用の学習を取り入れた。普通教室、情報教室やLL情報教室を使用し、基本教材も自主教材から様々な指定教材と多様な学習環境での試みであった。

そこで、基本利用法として3つのことを試みた。1番目は辞書情報の補完(例、succeed at と succeed in の比較)。2番目は知識の確認と記憶の定着(例 have a reputation for, wage war)。Shogakukan Corpus Network で BNC の共起検索を利用することによる類義語と形式の確認(例、effect on 以外に impact on や influence on も比較的に高い頻度で登場する)など。3番目は perception から production へのスキル向上。たとえば SwetsWise データベースを使い論文アブストラクトの特徴を把握してから学生自身がアブストラクトの作成をすることなど。

学生の評価は「今いち使い方がわからない」や「興味深かった」だったが、言語の変化やコーパスの利用価値を考えると、このような学習方法を開発してゆく必要性を感じる。残された課題として、授業への取り組み方と用例の量や解釈の対策がある。利用

時間の質問に対して、毎回90分授業のうちの10~15分のコーパス利用を行うよりも、まとめて一学期に2回、各30-40分をかけての学習の方が学生の反応が良かったとのことだった。また、コロケーションの用例を先生の方から提供するだけでなく、学生からも提案させることによって自主性を高めることに繋がるというコメントもあった。

野口ジュディー(武庫川女子大学)

シンポジウム

コーパスと言語理論:コーパスは言語理論にいかに関与するか

このシンポジウムの目的は、コーパスの理論研究への貢献、理論が必要とするコーパス、及びコーパスから引き出したい情報という視点を共有しながら、言語理論とコーパスの関係を論じることにあった。生成文法から小野隆啓講師(京都外国語大学)が、認知言語学から早瀬尚子講師(大阪外国語大学)が、語用論から田中廣明講師(関西外国語大学)が事例研究を含めた発表を行い、その後に質疑応答を行った。

コーパスと生成文法 言語研究の目標・対象・方法論

小野講師は、最初に生成文法理論の目標、対象、方法論を明解に論じた。それに続いて wh 移動、let go (of)構文研究にコーパス資料が有効であることを例証し、最後に使ってみたいコーパス、検索したい情報を論じた。その中で、I-language 研究のために一人のコーパスがほしいという注目が聴衆の関心を集め、後から質問が寄せられた。

コーパスと認知言語学 英語における姿勢維持動詞の意味と構文の発展について

早瀬講師は認知言語学がもっとコーパスを積極的に活用すべきだという論点から出発し、用法基盤モデルを紹介した。頻度が言語パターンを定着させ、言語使用が構文を形成し、カテゴリー化し、拡張するとした。そのケーススタディとして姿勢維持動詞構文の形成を BNC コーパスに基づいて説明した。丁寧な論証が聴衆の共感呼んだ。

コーパスと語用論 語用論はコーパスから何を引き出すことができるか

田中講師は、コーパスに基づく意味論、語用論研究はまだ初期段階だとしながらも、*Journal of Pragmatics* のコーパス特集記事を紹介し、今後の発展が期待できると述べた。事例研究として BEGIN+ 名詞句という興味深い構文をとりあげ、その解釈可能性を語用論的に絞り込むときに実際の使用例であるコーパスが役立つことを議論した。

最後の質疑応答では、コーパスの統語的、意味的分析が不十分であるという理論研究者からの指摘に対して、コーパス研究者側が現在、豊かな統語情報を含んだコーパスが構築されつつある、と答えるなど、理論とコーパスの相互交流が進んだ。

深谷輝彦（梶山女学園大学）

第 25 回大会の日程と研究発表募集

2005 年度の春期大会（第 25 回大会）は 4 月 23 日（土）に立命館大学衣笠キャンパス（〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1 TEL 075-465-1111; <http://www.ritsumei.ac.jp/>）で開催されます。是非、今から出張の予定に組み込んで頂ければ幸いです。大会準備委員、会長、事務局ともどもお待ちしております。

大会での研究発表を次の要領で募集いたします。発表を希望される方は、下記の要領に従って、電子メールで事務局にお申し込みください。

【資格】本学会会員であること

【内容】本学会にふさわしい、コーパス利用・コンピュータ利用を中心に据えた研究

【提出物】発表要旨を A4 判 25 字×32 行で 3~4 枚以内にまとめ MS Word、一太郎、PDF ファイルのいずれかで提出すること。ただし、参考文献表は枚数に含めない。要旨の冒頭には題名のみを記す。メール本文には氏名（ふりがな）所属・職名、住所、電話番号、電子メールのアドレスを明記すること。

【応募締切】2005 年 1 月 8 日（土）必着

【採否決定】2004 年 1 月末日（予定）

【その他】発表 25 分 + 質疑応答 10 分

会誌『英語コーパス研究』第 12 号について

『英語コーパス研究』第 12 号（2005）に多くのご投稿を頂きありがとうございました。今回は研究論文 5 本、研究ノート 1 本が寄せられ、現在、第 1 次の審査を終了したところです。審査は公正を期すべく、投稿者の名前を伏せたまま 3 名の査読委員により厳正に行っています。また、審査委員には、当該論文のテーマの専門家が配置されるよう努めながら、編集委員のほか、運営委員、学会員にも依頼しています。今回の投稿論文もコーパスを利用している点では共通しているものの、多岐にわたるテーマに分かれ、コーパスを使った英語研究の幅の広さを感じさせられます。次回以降も会員の皆様の積極的な投稿を期待する次第であります。

最後に、今後とも会員のご協力を得ながら、より質の高い学会誌の編集をめざしたいと思っておりますので、引き続きご支援、ご指導を賜れば幸いに存じます。

『英語コーパス研究』編集委員長 大津 智彦

学会賞募集

第 4 回の学会賞を募集致します。応募規定は次の通りです。推薦される方は同封の推薦理由書をお使いください。ホームページからも入手可能です。

【対象】英語コーパス学会の目的に照らし、英語のコーパス言語学に関する優れた研究業績をあげた学会員（個人またはグループ）とする。ただし、奨励賞は応募期限日において 35 歳以下の個人に限る。

【応募方法】自薦、他薦を問わない

【提出書類】1) 推薦理由書

2) 対象となる研究業績の現物またはコピー

【提出先】事務局

【応募期限】2005 年 3 月 31 日

【発表】2005 年度秋季大会

JAECS 創立 10 周年記念論文集について

2000 年 5 月 20 日発行の *Newsletter No. 29*、事務局からの欄に「学会設立 10 周年記念行事について」という記事があり、この中で、運営委員会として記念論文集の発行を考えていることが書かれています。翌年、第 17 回運営委員会で JAECS10 周年記念事業ワーキンググループが発足、このグループにより記念行事の骨格が策定されました。同年第 18 回運営委員会で、正式に 10 周年記念論文集の刊行が、編集委員、募集要項、執筆要領、テンプレートなどとともに決定され、第 18 回大会でこのことが報告されました。11 月 10 日発行の *Newsletter No. 35* には会員に対する論文投稿のお願いが掲載されています。当初、この事業は 2 年計画でしたが、諸般の事情があり、1 年遅れでこの秋の 24 回大会によりやく間に合う形で終了することができました。

記念論文集は、何度かこの *Newsletter* でもお知らせしましたように *English Corpora under Japanese Eyes: JAECS Anthology Commemorating its 10th Anniversary* としてオランダの Rodopi から *Language and Computers* のシリーズの 51 巻として刊行され、総ページ数 249 ページ、掲載論文数 12 編のハードカバーです。価格は EUR 55、あるいは US\$ 69。詳しくは、Rodopi のホームページ（<http://www.rodopi.nl/>）で *Series & Journals* のリンクから *Language and Computers Series* をご覧下さい。

編集委員会は正式にその役割を終えますが、この 3 年間、さまざまな形でご協力いただいた会員の方々に厚くお礼を申し上げます。まず、投稿いただいた会員諸氏の御努力に感謝いたします。学会の将来は先生方の研究に対する意欲にかかっておりますので、今後ともよろしくお願い致します。論文を

掲載させていただいた先生方には、編集作業中にも多大なご協力を頂きました。延べ 60 名以上の先生方には、査読をお願いするとともに論文をより良くするためのコメントを頂きました。おかげで編集委員一同一定のレベルに達した論文集が出来上がったものと考えております。最後になりましたが、論文集の刊行を 1 年近くお待ちいただいた会員の皆様全員のご理解に感謝致します。どうもありがとうございました。

JAECs 創立 10 周年記念論文集編集委員会
中村 純作
井上 永幸
田畑 智司

東支部活動報告

英語コーパス学会東支部では、2004 年 9 月以降、以下の 2 つの活動を行いました。熱心に講師を務めていただいた先生方と、参加者の皆様には心より感謝申し上げます。

第 1 回英語コーパス学会東支部研究談話会

日時：2004 年 9 月 11 日（土）13:30～18:00

場所：中央大学後楽園キャンパス 3 号館 14 階中会議室 1

山崎俊次（大東文化大学）「ICAME2004 報告」
千葉 庄寿（麗澤大学）「XML 関連技術を利用した用例検索ツールの開発」

吉村由佳（慶応大学非常勤）「コーパスを使ってコロケーションをどう教えるか」

参加者数は約 10 名でしたが、活発な議論がおこなわれ、有意義な談話会となりました。各発表者のハンドアウトは、<http://english.chs.nihon-u.ac.jp/jaecS/workshop/conference1.html> からダウンロード可能です。

第 12 回講演・講習会

日時：2004 年 11 月 27 日（土）14:00～17:00

場所：中央大学多摩キャンパス マルチメディアラボ 2102 教室

運営委員の投野先生との共同研究のため来日された Dr Paul Rayson 氏をお迎えして、講演 実践講習 自由操作と自由質問の 3 部構成のワークショップをおこないました。講演は、Keywords are not enough という題目で、氏の開発したコーパス統計分析システム Matrix の概略とその具体的成果について、実践講習では、その Web 版である Wmatrix の利用法を、参加者各自のパソコンを操作しながら学び、最後の部では、試作のテキストデータを使って参加者自身が自由に操作しながら、講師との自由な質疑応答をおこないました。参加者は約 20 名で、講師との交流が活発におこなわれた講習会になりました。なお、この

講演の部の内容資料は、http://www.comp.lancs.ac.uk/computing/users/paul/publications/jaecS_tokyo04.pdf からダウンロード可能です。

JAECs 東支部支部長 新井洋一（中央大学）

新入会員紹介

JAECs Newsletter No. 46（2004 年 9 月 1 日発行）以降の新入会員の方は次の通りです（12 月 2 日現在、S は学生、敬称略）。（**個人の住所および電話番号は、オンライン版のニューズレターでは公開しておりません。郵送されるニューズレターをご覧ください。**）

石井 康毅 東京外国語大学大学院 S
上田 博人 東京大学
太田 晶子 Portland State University S
佐藤 利哉 獨協医科大学
林 裕 関東学院大学
福田 薫 北海道教育大学函館校
藤井 宏 九州大学大学院 S
三浦 省五 広島大学大学院
汪 曙東 山口大学 S

新賛助会員紹介

館野 純子（株）ネットアドバンス/(株)小学館
101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-30 昭和ビル 3F 03-5218-0875
June.tateno@netadvance.co.jp

住所・所属等の変更

長尾 幸広 大阪星光学院中・高校

訃報

葉谷明子氏（名古屋工業大学）が 7 月 21 日午前 0 時 31 分、肝不全のため逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

寄贈刊行物の紹介（到着順）

高見敏子(2003) 『『高級紙語』と『大衆紙語』の corpus-driven な特定法』『大学院国際広報メディア研究科・言語文化部紀要』44. 73-105.

高見敏子(2004) 「特徴語の特定法 英・米・豪の新聞英語における語彙比較への応用」『The Northern Review』. 32. 31-66.

地村彰之. (2004) 「Chaucer の英語における音位転換」『ことばと文学 池上昌教授記念論文集』英宝社、pp.75-81.

Jimura, A. (2003) “A Historical Approach to English: Notes on Word Forms in Chaucer's English,” *Studies in Modern English: The Twentieth Anniversary*

Publication of the Modern English Association.
Eichosha, 12, pp. 31-44.

Jimura, A., Y. Nakao, M. Matsuo, N. F. Blake, and E. Stubbs eds. (2002), *A Comprehensive Collation of the Hengwrt and Ellesmere Manuscripts of The Canterbury Tales: General Prologue The Hiroshima University Studies*, Graduate School of Letters, Vol. 62, Special Issue No. 3, 2002. 12.

Jimura, A., Y. Nakao, and M. Matsuo eds. (2002), *A Comprehensive Textual Comparison of Chaucer's Dream Poetry*. (Okayama: University Education Press, 12) (平成 14 年度科学研究費補助金「研究成果公開促進費」助成出版).

古田八恵(2004)『英語コーパス入門 - コーパス分析ツール編 - 』三恵社.

杉浦正利(研究代表者)『なぜ英語母語話者は英語学習者が話すのを聞いてすぐに母語話者でないとわかるのか』平成 13 年度 ~ 15 年度科学研究費補助金 基盤研究(C)(2)研究成果報告書.

大名力(研究代表者)『コーパス利用による現代英語の語彙構文的研究』平成 13 年度 ~ 15 年度科学研究費補助金 基盤研究(B)(2)研究成果報告書.

事務局から

会費納入のお願い

2004 年度会費(一般 5,000 円、学生 3,000 円)未納の方には郵便振替用紙を同封致しておりますのでお納め下さい。郵便局発行の受領証をもって領収書に代えさせていただきます。住所、所属等に変更や異動のある方は、必ず通信欄にお書き添え下さい。

2003 年度会費未納の方は、2004 年度分と併せてお納め下さい(振替用紙にその旨記しております)。行き違いになりました場合は、何とぞご容赦下さい。2 年続けて会費未納の場合、JAECS Newsletter などの送付を中止させていただきます。

その他

事務局では、シンポジウムやワークショップの企画・アイデアを随時募集しております。英語コーパス学会の大会プログラムとしてふさわしい内容のものがありませんでしたら、どしどしご提案下さい。

FORUM 欄への投稿もお待ちしております。海外の学会・研究の動向、新刊・近刊図書の紹介、身近なコーパス研究のエピソード等でも結構ですのでお寄せ下さい。

ICEHL 13 に参加して

神谷昌明(豊田工業高等専門学校)

第 13 回国際英語史学会(13th International Conference on English Historical Linguistics; ICEHL 13)は 2004 年 8 月 23 日から 28 日までオーストリアのウィーン大学(University of Vienna)で開催された。神谷は日本学術振興会科学研究費補助金の助成を受け出席した。参加者は約 250 名。4 会場で 100 を超える研究発表があった。多くの研究発表はコーパスを利用したものであり、Helsinki Corpus、OED を利用した発表が目立った。その他 Corpus of English Dialogues(CED)、Corpus of Early English Correspondence (CEEC)、Corpus of Nineteenth-Century English(CONCE)、Corpus of Middle English Prose and Verse(CME)など多種多様なコーパスが利用されていた。英語史研究においても、コーパスは必要不可欠なものになっていると改めて痛感した。特に有意義であった発表(Teach In)は Pintzuk Susan と Ann Taylor(University of York)による *The Use of Historical Corpora in Linguistic Research* であった。Pintzuk Susan は Helsinki Corpus の OE 部分に統語標識を付加した Brooklyn Corpus を構築した研究者の一人である。史的コーパスに統語標識を付加する困難さを改めて知った。

ウィーン大学はドイツ語圏最大の大学であり、今までに 12 名のノーベル賞受賞者を輩出した名門大学である。学生数は 65,000 人を超え、広大なキャンパスを中心に学園都市を形成している。学内にはいくつものピアガーデンがあり、昼は多くの研究者と交流を深めることができた。

ICEHL は隔年で行われ、次回は 2006 年、イタリアの Bergamo で開催予定。ICEHL 14 研究発表申し込み締め切りは 2005 年 11 月 30 日。<http://www.westerni.unibg.it/anglistica/slin/14icehl-home.html>

日英パラレルコーパスで帰納的英語学習

中條 清美(日本大学)

英語コーパスが期待されるほど教室で利用されていない理由の 1 つに、コンコーダンスラインの英語が難しすぎて、学習者が語法の検証や発見にまで至らないということがあります。その点、日本語対訳を持つ日英パラレルコーパスを使うと、日本語訳の助けによって教材の難易度がかなり軽減されるので、英語初級者を対象としたクラスでも DDL (data-driven learning) を実施することが可能です。

本欄では、本学会会員、内山将夫氏を中心に情報通信研究機構 (NICT) で開発された日本語文・英語文の対応付けコーパスを 2 種類紹介します。

日英新聞記事対応付けデータ^[1]

約 12 年分の「読売新聞記事」と *The Daily Yomiuri* において、互いに翻訳関係にあるような文対応を自動的に対応付けたもので、18 万文対応(英語単語数約 476 万語)から構成されています。新聞記事データの特徴は、ある程度翻訳の品質が保証され、かつ、分野やスタイルが均質なデータが大規模に得られる点です。

筆者はこの対応付けコーパスを初級学習者向けの TOEIC 語彙増強のための指導に利用しています。例えば、検索プログラムの ParaConc (Barlow, 2002) を使用して TOEIC で必修の‘file’を検索すると、図のような検索結果が得られ、「訴訟を起こす」という意味と用法を多数の自然な文脈の中で、帰納的に学習することができます。

新聞記事対応付けコーパス・データは <http://www2.nict.go.jp/jt/a132/members/mutiyama/jea/index-ja.html> より無償で利用可能です。現在のところ、ParaConc などの検索用ソフトウェアを用意する必要がありますが、NICT では検索サイトを今年度中に開設する予定とのことです。

日英対訳文対応付けデータ^[2]

もう一つのパラレルコーパスは、*The Black Cat* から *The Declaration of Independence* まで多種多様な散文を収集したもので、再配布可能な作品(プロジェクト杉田玄白、Project Gutenberg、青空文庫等の作品)について、人手により日本語文と英語文を対応付けたものです。現在、101 作品(約 7 万行、英単語数約 84 万語)が公開されており、対訳データ全体を <http://www2.nict.go.jp/jt/a132/members/mutiyama/align/index.html> からダウンロードできます。



以上の 2 つのパラレルコーパスは、英語だけでなく日本語の教育・研究分野にも利用できますので、会員の方々の多彩なニーズに応えることが期待されます。

[1] 内山将夫, 井佐原均 (2003) 「日英新聞の記事および文を対応付けるための高信頼性尺度」『自然言語処理』, 10:4, 201-220.

[2] Masao Utiyama (2003) “Japanese-English Bilingual Corpora and Their Applications.” *Asialex* 2003.

N-grammer と Pos-ngrammer の紹介

後藤 一章 (大阪大学大学院生)

<http://uluru.lang.osaka-u.ac.jp/~k-goto/>

現在、N-grammer と Pos-ngrammer という 2 種類の N-gram 分析ツールを HP 上で公開しています。N-grammer は単語単位で N-gram 分析を行うツールで、Pos-ngrammer は品詞単位で N-gram 分析を行うツールです。対応 OS は Windows 98/2000/XP で、特別なランタイム等は必要ありません。フリーソフトですので、気軽にご利用いただけます。

N-grammer と Pos-ngrammer の特徴として、GUI (Graphical User Interface)形式である点が挙げられます。GUI のため、コマンドラインの知識や、煩雑なコマンドタイプの必要がなく、直感的なボタン操作のみで多様な N-gram 分析が可能です。

以下で N-grammer の基本的な操作を紹介していきます。N-grammer を起動すると、次のような画面が現れます。



画面の左上部分には自分のコンピュータのファイル構造が表示され、視覚的に分析したいファイルを指定することができます。なお、ここでファイル名をダブルクリックすると、右下の「ファイルプレビュー」欄に当該テキストの内容が表示されます。分析するファイルが決定したら、中央の「追加」、あるいは「すべて追加」ボタンを押して、右上の「選択リスト」へファイルを追加していきます。

また、左下の「設定」部分では、N-gram の N の値や、出力ファイルの保存先などの設定を行います。「マージ」枠の「全ファイルを 1 つにマージして処理」を選択すると、選択リスト内にあるファイルをすべて連結して N-gram 分析を行うことができます。

最後に「START」ボタンを押すことで N-gram 分析が開始されます。分析が終わると自動的に次のような画面に切り替わります。



左側に表示されるファイル名をダブルクリックすることで、図のように右側の「ファイルプレビュー」にファイルの内容が表示されます。

Pos-ngrammer も基本的には同じ方法で分析することができます。Pos-ngrammer を利用する際の注意点は、あらかじめ付与されている品詞タグの形式を確認しておくことです。現時点(2004 年 12 月 Version 0.2)では、BNC の SGML 形式 (<w PNP>you)と、単語とタグをアンダースコアでつなぐ形式(you_PRP)の 2 種類に対応しています。それ以外の形式で品詞タグが付与されているものに関しては現在のところ分析が行えません。この点に関しては、もしご要望があれば対応していく予定です。

さらに詳しい情報に関しては、上記の筆者の HP 上に掲載しています。興味を持たれた方は、ぜひ一度ご覧ください。